第 548 号

音楽の世界

目　次

論壇　白鳥の歌　中島 洋一　2

特集　Fresh Concert -CMDJ2013-の出演者に訊く！　4

リレー連載　未来の音楽人へ(4)　北川 暁子　12

長期連載

音・雑記ーひなの里通信ー (57) ・・・・・・・・・・・・・・ 狭間 壮　18

名曲喫茶の片隅から (38) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮本 英世　20

音 盤 奇 譚 (43) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 板倉 重雄　22

私とラジオ・ドラマ (10) ・・・・・・・・・・・・・ 助川 敏弥　24

短期連載

電子楽器レポート・連載ー5　《関西二期会「愛の妙薬」》
ハイブリッドオーケストラによる斬新的なオペラ公演　阿方 俊　26

福島日記(19)　小西 徹郎　28

小特集　若い会員は語る(その2)

ゼロからスタートして音楽の道に入って　小西 徹郎　30

若手演奏家が活動して行く為に　湯川 亜也子　32

コンサート評　第２回　動き、動作、所作と音楽　国枝 たかこ　33

コンサート報告　第５回フランス歌曲研究コンサート　36

日本音楽舞踊会議：出版楽譜のご案内・・・・・　高橋 雅光　38

時評　古い村の崩壊と新しい村の建設　日野 啓太郎　42

コンサート・プログラム

Fresh Concert CMDJ 2013　44

CMDJ 会と会員の情報　56

論壇

白鳥の歌

作曲　中島 洋一

死に瀕した白鳥が、生涯で最も美しい歌を歌うという言い伝えがある。芸術家の遺書ともいえる最後の作品を「白鳥の歌」に喩える比喩は、かつては、文学者や芸術愛好者の間で好んで使われていたようである。ところで、シューベルトの『白鳥の歌』は、作曲者の死後、友人達が彼の遺稿をまとめ歌曲集として『白鳥の歌』の名を付けて出版したものだが、今では『白鳥の歌』とはこの作品の固有名称のことと誤解する人もいるほどで有名である。

芸術家にかぎらず、人は自分の死期を予感した時、自分が生きた証を何かで残そうと願うであろう。「白鳥の歌」とは、一般的にはその芸術家の最後の作品を意味するが、芸術家が自ら人生との告別を意識して作品を書くことも少なからずあると思う。グスタフ・マーラーなどは、幾度も告別の曲を書いている。

まず、生への執着からか、最後の交響曲となることを恐れ「第九」の番号を与えなかった交響曲『大地の歌』。アルト歌手が「ewig, ewig. . .（永遠に、永遠に. . .）」と何度も繰り返し、最後に第5音を省いたトニックの付加６（ド、ミ、ラ）の和音で消えるように終わるこの作品の終楽章「Der Abschied〈別れ〉」の最後の部分など、若い頃にはつい涙ぐみながら聴いたものである。次にやっと決断して「第九」の番号を付した交響曲第９番。この最終楽章の変ニ長調アダージョも正真正銘の別れの歌である。消えるように終わるフェルマータを付した音符をもつ最後の小節には、『大地の歌』と同じく、ersterbend（死に絶えるように）という言葉が付されている。そして本当に彼の白鳥の歌になってしまった交響曲第10番、この作品は未完成で終わっているが、作曲者自身が完成させた第一楽章のアダージョからも、憂いと慰みに満ちた別れの心情が、聴き手の心に染み込むように伝わって来る。

モーツァルトの遺作となった『レクイエム』については、灰色の服を纏った見ず知らずの作曲依頼人をモーツァルトは天からの使者と思い込み、作曲に着手したという逸話が残されている。その逸話は信じ難いが、たとえ依頼者が判っていたとしても、死期を悟った作曲者が自分自身のために『レクイエム』の筆を進めようとしたことは、十分に想像出来ることである。最初の８小節だけ書いて絶筆となった「ラクリモーサ(涙の日)」の心をかきむしるように上行する半音階は、そこで彼が力尽きとことを窺わせる。そして、この作品はモーツァルトの白鳥の歌となった。

『レクイエム』はモーツァルト 35 才の作品だが、より若年の作者が「白鳥の歌」となるかもしれないということを意識して書いた作品の例をあげよう。

それは、加藤道夫の戯曲『なよたけ』である。この戯曲は今日では劇場で上演される機会はそう多くはないが、戦中戦後に生まれた日本の戯曲作品の代表的作品で、三好十郎の『炎の人』と並んで、私が最も好きなこの時代の戯曲作品である。

物語は、時の権力者、大納言大伴ノ御行（みゆき）の陰謀により、東国に父とともに左遷された石ノ上ノ文麻呂（ふみまろ）が、貧しい竹籠作りの娘、なよたけと友人との恋をとりもつうちに、なよたけの天女のような清らかな美しさに次第に惹かれ、やがて激しい恋に陥り、幻想の世界を彷徨うようになる。幻想の世界で、なよたけは彼の腕に抱かれて死ぬが、現実の世界では仇敵大納言大伴ノ御行のめかけになる。文麻呂はこの失恋の体験を経て、日本の古典文学の中でも最も美しい作品『竹取物語（かぐや姫の物語）』を書く決意をする。

この作品については、初版本の後書きに作者自身が「ちょうど戦争が酷な頃で、作者は数ヶ月後には南方で通訳として赴任しなければならぬ身であった。僕が『なよたけ』を書いたのは、そう云う精神の不安を抹殺しようという気持ち、何か生きていたという証拠を書き残して置こうと云う気持ちからだったようである。」と書いている。私がこの作品に接したのは作者がこの作品を書いた 25 才時より 10 年ほど年を重ねた 35 才くらいの頃だったと思うが、いくらか女々しさを感じさせるところがあるものの、傷のない美しい大和言葉で連ねられた台詞を通して内なる聖女の姿を追い求めようする作者の青春の魂の燃焼が伝わって来て、死を覚悟し遺書としての残そうとした作品ならではの清澄な叙情性を感じた。

なお、戦時中に書かれたこの作品を巡っては、空襲で原稿が焼失することを恐れた劇団仲間たちが、手書きで原稿の複製を三通作り、それぞれ手分けして保管し、戦争が終わったら舞台にかけようと誓い合ったという逸話が残っている。加藤道夫は戦死せずに無事帰国するが、昭和 28 年（1953 年）に自殺している。『なよたけ』の初演はその 2 年後のこととなった。なお加藤道夫の妻は、浅見光彦シリーズの母親役など、テレビ、映画、舞台で活躍している女優の加藤治子である。

戦時中には、年端もいかない多くの若者たちが戦地で死に直面した。芸術作品ではないが、特攻隊員として死んで行った若き兵士たちの手紙や手記などには、胸を締めつけられるように心打つものが少なくない。戦争でなくとも、大震災などで、突然肉親や、親しい友人を失った人も多かろう。人は死を意識したとき、自分の生をあらためて深く見つめ直そうとする。いまの若者たちの多くにとって、死は身近な存在ではないかもしれないが、何時か死と生について、正面から向かい合わなければならない時が訪れよう。その時、自分は何を残せるか、何を残しておきたいかを強く意識するようになるのではなかろうか。私の場合は、幼くして肉親と死別する体験をしており、常人より死に対して敏感な筈なのだが、性格が愚図で怠け者のせいか、大切なことになかなか手をつけられず、ついつい後へ後へと廻してしまう。従って、まだ自分の「白鳥の歌」を残していない。このままでは、死にきれないという思いがあるが、もし、「白鳥の歌」を残さず死んだとしても、自分自身を恨むことしか出来ない。時はどんどん過ぎて去って行くが、人の命には限りがある。このことは老若男女を問わず、つねに頭に入れて生きていなければならないのであろう。

（なかじま・よういち　本誌　編集長）

特集　Fresh Concert –CMDJ 2013–の出演者に訊く！

Fresh Concert は昨年で第 10 回目を終えました。10 年一昔と言いますから、第１１回目を迎える本年は新たなスタートを切るコンサートと言えましょう。ところで「出演者に訊くシリーズは今年で７回目となります。第１回～第４回までは座談会を開いて記事にしていましたが、なかなか全員が集まれないので、第５回目からは幾つかの質問項目を用意し、その回答をこの雑誌に掲載するようにしています。今年の質問項目は昨年と大きくは変わっていませんが、第６回目の 2008 年度の質問項目にもあった（４．）を復活させてみました。また、（５．）も昨年度にはなかった質問項目です。

１．今回のコンサートへの抱負、演奏する曲に対する思いなどを込めたメッセージをお願いします。
２．あなたにとって、音楽とは、いかなるものですか。
３．取り組んでみたい研究テーマ、挑戦してみたい、作曲家、作品は？
４．もし、自分の余命があと１年しかないと知ったら、何をやりますか。
５．音楽の道を選ばなかったら、何をやっていたと思いますか。
６．あなたの長所と短所は？
７．その他（書きたいことをなんでも書いて下さい。書かなくともいいです）

出演者の方々の回答を読むと、（１．）のメッセージは例年通り皆さんが力を入れて書いております。（２．）の質問項目を読むと、いまの出演者にとって、音楽とは酸素や食事のように日常的に欠かせないものであることがわかります。（４．）については、みなさんがまだ若く、あまり切実な問題として感じられないせいか、深刻に受け止めた回答は少なかったようです。（５．）については、音楽以外の道は考えられないという回答から、漢方医、地球外生命体の研究者、水泳選手など、音楽とはかなり異なる分野をあげた人もおり、興味深く思いました。しかし、全体的にみると音楽の道を選ばなかった場合でも、やはり、絵を描いていただろうとか、美術館の学芸員など、芸術関係の分野を選んだ人が多かったようです。また、いまの若い人たちに目立つ傾向ですが、音楽を通してでも、あるいはそれ以外のことでも、とにかく何か世の中に役に立つことがしたいという気持ちが強くあるように感じました。そういう若い人たちの心をとらえ、その活力を生かして行ける仕組みが、今の世の中にはまだあまり育っていないのかもしれません。このようなコンサートを毎年開催しているのも、音楽の分野において若い人たちの前向きなエネルギーを引き出したいというこちら側の強い願いがあってのことだということを、若い出演者の方々、そしてこの雑誌の読者の方々、コンサートを聴きに来て下さった聴衆の方々に判っていただければ幸いです。

アンケートを読むと、若い出演者たちの将来に向けた希望と意欲が伝わって来ますが、これからはいままでになかった険しい道が待ち構えているかもしれません。しかし、初心を忘れずに頑張ってもらいたいと思います。

それでは、出演者のみなさんの回答を、演奏順に紹介させていただきます。
　なお、ページ数節約のため、質問事項の重複掲載は避け、回答のみを掲載させてもらいました。出演者の写真につきましてはプログラムのページに掲載しておりますので、そちらを併せてご覧頂きたいと存じます。

① サクソフォーン四重奏：　内田 しおり（ソプラノ・サックス）／中村 有里（アルト・サックス）
小田 采奈（テナー・サックス）　／丹沢 誠二（バリトン・サックス）

１.今回演奏させて頂く曲は、世界的に有名な雲井雅人サックス四重奏団が委嘱し、世界初演を果たした曲です。我らが師でもある雲井雅人氏が演奏した曲を、自ら演奏出来る喜びを感じ、作曲家本人が口にした「心をオープンに」という言葉をテーマに、演奏に臨みたいと思います。(内田)
　今回のコンサートは、大学生活の中で得た大切な仲間と、卒業してから初めての演奏会となります。学生ではなく、社会にでてプロとして歩みだした私たちの初めての演奏会。素敵な、輝かしいスタートとなるよう精一杯演奏させていただきます。（中村）
　今回の曲は、我が師である雲井雅人氏のサックス四重奏団が委嘱し、世界初演を果たした曲です。師や作曲家本人の言葉から学んだことを生かし、譜面上のことだけでなくそこを越えて、音楽と対話できるような演奏をしたいです。（小田）
人間の命、に深く関わりのある楽曲なので、曲の持つメッセージを聴衆に伝わるような演奏にしたいです。（丹沢）
２．音楽とは心の会話であり、生きる活力です。（内田）／なくてなはならないもの。
音楽がなかったら今の私は存在していません。（中村）／自分を表現できるもの。言葉。（小田）／人を幸せにする魔法です。（丹沢）
３．バロックや古典の作品をサックスでどこまで追求出来るか、バッハやシューベルトが当たり前に演奏出来る楽器に成長することが、今後の課題です。（内田）
　バロック、古典等、サックスのオリジナル曲がない時代の曲をどうサックスで表現するかを模索しております。現代曲にも積極的に取り組みたいとおもっております。（中村）

音楽現代
2013 年４月号　　定価 840 円

♪特集＝最後の交響曲に込めた想い～ハイドンから黛敏郎まで 16 人をめぐって
♪特別企画＝ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン《熱狂の日音楽祭》2013　～パリ、至福の時
♪カラー口絵
・東京芸術劇場「カルメン」
・藤原歌劇団「仮面舞踏会」
♪好評連載　今月のＲ・ワーグナー＆Ｇ・ヴェルディ《「アイーダ」＆「ニュルンベルクのマイスタージンガー」》
♪新連載スタート！
日比谷花壇×音楽現代 コラボ企画
「日々♪花デンツァ」〈上田弘子〉
音楽を食う〈西澤健一〉

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

イベールのコンチェルティーノです。私は一度も挑戦したことがないというのと、ミュールの名演を聞き、サックス本来の美しさにせまりたいと思い、挑戦してみたいです。（小田）／映画音楽。（丹沢）

４．たぶん楽器を吹いています。（内田）／大好きな家族、仲間とたくさんの楽しい思い出を作りたいです。勇気がなくて踏み出せていないもの全て、後悔のないよう全力で取り組みます。（中村）／色々な場所に行って演奏会をします。（小田）／今と変わらぬ生活を送る。（丹沢）

５．絵を描いているか、芸人を目指していると思います。（内田）／水泳選手を目指していたと思います。（中村）／カウンセラーや接客業など人と話す仕事をしているとおもいます。（小田）／役者。（丹沢）

６．長所は物怖じしない所で、短所は大雑把な所です。（内田）／長所は集中力があること、短所はひとつのことにこだわりすぎることです。（中村）／長所はあきらめないところで、短所は心配性、考えが硬いところです。（小田）／長所は思いやりの心があるところ。短所は楽天的すぎるところ。（丹沢）

②　保坂 瑞枝（声楽：ソプラノ）

１．本日は、このようなコンサートで演奏させていただくことができ、心から感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。親愛なる秋山先生、中島先生、共演者の皆さん、今回の演奏会にかかわる全ての人に、心から感謝申し上げます。

本日演奏する曲目はフランス歌曲の中の fauré 作品から、選曲させていただきました。３曲とも、私の大好きな曲で、特に３曲目の fauré の“En sourdine”が特に大好きな曲なので、大切に歌えたらと思います。

２．言葉では言いあわらせない大切なものです。

３．引き続きフランス歌曲を勉強していけたらと思います。

４．大好きな音楽を沢山聞いて、心を満たしながら頑張って寿命をのばします（笑）

５．音楽の道を選びたいです。（笑）

６．長所はわからないですが、短所は物事を急いであわててやろうとして、冷静さを欠いてしまう時があるところです。

③　吉田 連（声楽：テノール）

１．本日はお越し頂きありがとうございます。ご来場下さいました皆様、また家族、仲間、先生方を始め、これまで支えて下さった多くの皆様にたくさんの感謝を込めて歌いたいと思います。新たな一年のスタート、その船出に相応しく、たくさんの勇気や温もりが皆様の心に届けばこれに勝る喜びはありません。

２．言葉

３．マスネ作曲《マノン》、ヴェルディ作曲《椿姫》など、オペラのレパートリーを増やしたいです。
４．そこをなんとか２年になるように交渉する。
５．お寿司屋さんでお皿を洗うか、廻すかしていると思います。
６．長所は慎重なところで、短所は慎重過ぎるところ。石橋を叩いて壊してから結局橋を使わず渡るくらいの大胆さが欲しいです。

④　小林 萌里（ピアノ）

１．今回演奏させていただくメフィストワルツは、レーナウの詩「ファウスト」のストーリーが背景にあるので、自分自身もその物語をよく勉強し、演奏に反映できたらと思います。とても華やかな曲ですが、作品の持っている悪魔的な感情も理解して演奏できたらなと感じています。
２．国境なく会話できるもの。様々な人達と繋がることのできるもの。自分を一番発信できるもの。
３．クラシックでは、シベリウスの作品に取り組んでみたいのと、友人の作品を演奏していけたらと感じています。そして現在弦楽器の仲間とアストル・ピアソラの作品を含めたタンゴ音楽も勉強して演奏しているので、さらに深く研究したいと思っています。
４．四国八十八ヶ所巡礼の旅に出ます。
５．漢方医、地球外生命体の研究者、考古学者のどれかを選んでいたと思います。
６．長所は思い立ったら即行動するところで、短所は計画性がない行き当たりばったりなことを時々することかもしれません。

⑤　種谷 典子（声楽：ソプラノ）

１．大学院を修了し、この度御披露目の機会をいただけました事を大変嬉しく思っております。本日演奏しますのは、旋律の持つ甘美さに純粋に心惹かれた大好きな歌曲です。ピアノ独奏曲としても有名ですが、そのメロディーラインの柔らかな繊細さはまるで一本の絹糸の様で、″強い″声に頼るとその糸が途切れてしまいそうになります。ペトラルカのしたためた言葉に込められた愛する人への情熱を、心を込めて″熱い″声で表現出来たらと思います。
２．どんな時も、私の存在を認識させてくれるもの。
３．偏りなく学べるのが一番ですが…フランス語のものは少しかじっただけだったのでしっかり学べたらと思っています。
４．毎日笑顔でいられたら、それが何よりの幸せかと思います。
５．本格的に声楽を始めるまでは勉強も好きでしたので、得意な科目の教師になる事を考えたこともありました。社会科とか、国語とか…

６．良くも悪くも考え過ぎてしまう所。

⑥　金管五重奏：　石橋 由衣（トランペット　Ⅰ）／森田 小百合（トランペット　Ⅱ）
萩野谷 美咲（ホルン）／梅澤駿佑（トロンボーン）／若松将正（チューバ）

１．今回演奏するターナー作曲「リコシェ」は、私たちメンバーにとって思い出深い曲です。金管らしい華やかな曲ですが、中間部には穏やかな曲想もあり、変化に富んだとても素敵な曲です。独特な世界観を表現できたらと思います。（石橋）
　演奏させて頂ける機会を有難うございます。この曲はかなりの難曲ですが、大学で学んできたことを活かして精一杯演奏したいと思います。（森田）
　今回演奏する曲は音域的にも技術的にも難しい箇所が多く苦戦しましたが、演奏会では聴いている人に「難しさ」ではなく「楽しさ」が伝わるような演奏をしたいと思っています。（萩野谷）
　今回このような演奏会に出させて頂けることに感謝し、聴いてくださるお客さんに感動して頂けるような演奏をしたいと思います。（梅澤）
　非常に個人的な話になりますが、リコシェは昨年の今頃、丁度このメンバーで演奏する機会があり、練習していた曲です。我々の団体は約１年間、活動を停止しておりましたが、各々が１年を経て学んだことが、同じ曲を通して、更に前よりもレベルアップした演奏を発揮できるように頑張りたいと思います。（若松）
２．人生を豊かにし、思い出とともに心に残り続ける一生忘れないものだと思います。（石橋）／空気と同じくらい必要なものです。（森田）／腐れ縁みたいなものです。うまくいかないことがあっても結局は続けたい、関わっていたいと思わせてくれるものであり、生きがいだと思います。（萩野谷）／自分を表現する手段（梅澤）／私にとって、音楽は呼吸、生きていることです。音楽を通してこそ、悩むことができ、自分を省みることができます。（若松）
３．エワルドの金管五重奏曲１～４番。（石橋）／ジョリヴェなどの現代曲に挑戦したいです。（森田）／この５人でエワルド作曲の金管五重奏曲の第２番をやってみたいです！（萩野谷）／bozza の金五（梅澤）／アンサンブルにおけるチューバの可能性を拡げることをテーマに、様々な形態のアンサンブルをしてみたく思います。（若松）
４．後悔の無いように自分のやりたいことをします。コンサートを開く、旅行へ行く、会いたい人に会う、好きなものを身に着け、美味しい物を食べる、など。（石橋）／世界旅行がしたいです。（森田）／食べたいものを食べたり、行きたいところに行ったり、大切な人達と残りの時間を過ごすと思います。（萩野谷）／　世界中を旅行する（梅澤）／
　音楽において後世に残るものは、楽譜か録音と思います。私は、自然に身を置いて、曲を書くことをしたいと思います。（若松）
５．自分の好きなことに関わることをやっていたと思います。ジュエリー関係や料理関係など。（石橋）／一般大学の女子大生になっていたと思います。（森田）／高校二年まで本格

的に音楽の道に進もうと思っていませんでした。その時は幼稚園の先生になろうかなと考えていたので幼稚園教諭ですかね。(萩野谷)／自動車関係、もしくは保育士(梅澤)／
　音楽の他にやりたいことが存在しなかった私にとって最も難しい質問ですが、音楽の道に進もうと考えたのも、音楽を通して人の役に立ちたいと思ったからなので、人に喜んでもらえるような仕事についていたと思います。(若松)
６．長所、温厚である。短所、考えすぎるところがある。(石橋)／長所、人見知りしないところです。短所、短気で、感情がすぐ顔に出てしまうところです。(森田)／素直なところとよく食べることです。長所でもあり短所でもあります。(萩野谷)／長所、何かを始めたらこだわりをもって最後までやり遂げる。短所、 時間にルーズ(梅澤)／長所は、とにかくあらゆる方向から考え、最善になるように努めようとすることで、短所は、考え過ぎる故に、１つの自分の意見を持てないことです。(若松)

⑦　尾形 志織（声楽：ソプラノ）

１．今回のコンサートへの抱負、演奏する曲に対する思いなどを込めたメッセージをお願いします。今回歌わせていただくのは≪ルチア≫という女性の終幕のアリアです。
このアリアは別名「狂乱の場」ともいいますが、彼女の命の灯が激しく燃えつきる長大なアリアとなっています。私はこのルチアという女性を大学院時代に研究させていただきました。その中で彼女の愛しさが増していき、私にとって彼女の存在は今でも大きな存在となっています。「狂乱の場」は、それまでの狂乱オペラの中のものと比べて、常軌を逸したくらい繊細で、またそれまでの時代の作品の中でもとりわけ壮大なアリアとなっています。カヴァティーナの精神崩壊ぶりをみて、そして、ラストの底抜けに明るいカバレッタでは、もうその痛々しいほどの明るさに手も差し出してあげられないほど、彼女のエドガルドへの愛を感じ、そして「生」と「死」という世界から解放されていく彼女に、胸が締め付けられる想いになるのです。私自身、今回またこの狂乱の場を歌う機会を頂きまして心から感謝しております。どうぞ、ルチアの魂が感じられますように、誠心誠意演じさせていただきます。
２．精神表現の主なツールです。歌曲でもオペラでもピアノでもオーケストラでも、そこにいつも心があり、それを表現するための美しく尊い大切なツールだと思っています。
３．むむむ。たくさんありすぎて困りました（笑）でも、この先ずっと舞台でお付き合いしていきたいキャラクターは、≪フィガロの結婚≫伯爵夫人と≪ランメルモールのルチア≫のルチアです。この二人には、本当に思い入れがありますので。
４．大切な人と過ごします。これにつきます。
５．私が今求めている舞台という場所が「音楽の道」と言えるものであれば、選ばないという選択はなかったと思います。たとえ道に迷ってもこの場所へ来ていたのではとおもいます。きっと。ちなみに、中学の頃の夢は某音楽レーベル会社でバリバリのキャリアウーマンになることでした（笑）

６．　長所は妄想家であること。短所は思い込みの激しいところです。いつでも長所と短所は表裏一体です（笑）

⑧　宮崎 芳弥（ピアノ）

１．バラード３番は、ショパンと同郷のミツキエヴィッチの詩「水の精」からインスピレーションを受けて書かれたものとされています。一般に、″ショパンは絶対音楽主義者で、文学とは結びつけずに音楽だけで世界を表した作曲家″と言われていますが、私はこの曲は例外的にストーリーが色濃く反映されているように感じました。詩の内容を交えたイメージをお話します。物語は、水の精と騎士の会話から始まります。２人は愛を誓いますが（第１幕)、水の精は１人になると不安になり、騎士の愛を試そうと考えます。(第２幕)、水の精は女の人に化けて騎士を誘惑し、騎士はその美しさに惹かれてしまいます。(第３幕）水の精は騎士の心変わりを悲しみ、復讐のために騎士を湖に沈めてしまいます。(第４幕）その後は、水の精の回想シーンのように、愛のテーマが美しく華やかに再現されます。
この曲は、全体を通して優雅で気品があり、ドロドロした印象はあまりありません。私は、バレエの軽やかなステップを連想させる湖の波模様や、水の精の心の変化を描けるように演奏したいと思います。

２．①宇宙のように無限なもの②人生と共に感じ方も変わるもの③空間的に生きた世界を表現できるもの
３．まだレパートリーの少ないフランス作品をバロック時代から辿っていきたいです。
４．できるだけ人の役に立つことをしたいです。
５．今急増している現代病（アレルギー、うつ病等）の根本的な原因の対策を考え、世の中に広める仕事。
６．長所・・・一つのことに熱中できること。短所・・・その他のことがテキトーになること・・・。
７．アンサンブルの勉強を沢山したいので、ピアノ伴奏が必要なことがありましたら、お声をかけてください。

⑨　藤原 唯（声楽：ソプラノ）

１．今回歌わせていただく曲は、G.ドニゼッティのアリアの中で最も好きな曲です。緊迫感溢れる前半と、流麗な旋律の後半、この曲の持つ様々な表情とアンナ・ボレーナの狂気を、美しく表現できたらと思います。
２．時に苦悩を、けれど何にも変え難い喜びと幸せをもたらしてくれるものです。
３．リゴレットのジルダは今後も深めていきたい役のひとつです。そして、そろそろフランスオペラに挑戦せねば！と思っています。

４．元気なら、家族と世界一周の旅に行きたいです。
５．絵画や工作が好きなので、違う分野でアーティストを目指していたと思います。
６．長所：何事にも真摯に取り組むところ、おおらかなところ
　　短所：考えすぎて迷走するところ

⑩　芦田 瑞樹（バリトン）

１．国立音楽大学大学院修了生として今回ご出演させて頂けたことを誇りに思います。また、素晴らしい同期の方々と同じステージに立てることを光栄に思います。お客様になんらかの形で満足して頂ける演奏を目指して歌わせて頂きたいと思います。
２．かなり長いこと考えたのですが、とても難しいご質問です。［共にいるもの］でしょうか。
３．シューベルト［冬の旅］
４．基本的にそれまでの日常を継続するつもりです。
５．美術館の学芸員
６．正直で繊細なところです。

+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

過去のFresh Concert CMDJ の開催記録

第1 回　2003 年 3 月 19 日（水）：18:30　新宿角筈区民センターホール
第2 回　2004 年 4 月 6 日（火）　：18:30　めぐろパーシモンホール（小）
第3 回　2005 年 3 月 30 日（水）：18:30　めぐろパーシモンホール（小）
第4 回　2006 年 3 月 28 日（火）：18:30　めぐろパーシモンホール（小）
第5 回　2007 年 4 月 6 日（金）　：18:30　すみだトリフォニーホール（小）
第6 回　2008 年 4 月 5 日（土）　：18:30　すみだトリフォニーホール（小）
第 7 回　2009 年 4 月 8 日（水）　：18:30　すみだトリフォニーホール（小）
第8 回　2010 年 4 月9 日（金）　：18:30　すみだトリフォニーホール（小）
第9 回　2011 年 4 月 8 日（金）　：18:30　すみだトリフォニーホール（小）
第 10 回 2012 年 4 月 13 日（金）：18:30　すみだトリフォニーホール（小）

※演奏曲目、毎回の出演者など詳細情報をごらんになりたい方は
　インターネットの以下のＵＲＬにアクセスして下さい。

http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh_concert_top.htm
日本音楽舞踊会議　のキーワードで検索すると以下のＵＲＬが表示されます。
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　　（アーカイブ）
ここから上記のページに入れます。

リレー連載

未来の音楽人へ（４）

ピアノ　北川 暁子

学生時代～それが当たり前のこと、普通のことだと思っていた～

私は、ヴァイオリン奏者であった父（北川庸二郎・元 NHK 交響楽団）と、掃除をしながら SP レコードを聴く母、という、常に音楽があるのが当たり前、という家庭に育ちました。妹（北川靖子）はヴァイオリンをやっていました。小学校のときは、クラスでピアノを弾く子が一人いるかいないか、という感じでしたが、それでも、自分がピアノを弾くことは当たり前だと思っていたし、自分は普通の人間だと思っていました。

小学校５年生のとき、父の友人のご紹介で、L. コハンスキー先生のレッスンに通うようになりました。当時、コハンスキー先生は、武蔵野音楽大学と桐朋学園大学で教えていらしたのですが、私のような子供の生徒はいませんでした。コハンスキー先生のレッスンを受けるという話が出たとき、武蔵野では、子供のレッスンに先生の時間がとられてお疲れになる、との声があがり、入門テストに武蔵野からも関係者が同席されたことを覚えています。無事合格して、毎週レッスンに通うことになりました。

レッスンは１回１時間なのですが、ハノン、エチュード、バッハ、ベートーヴェンやその他のショパンなどの曲が１時間きっかりで要領よく終わったのには感心したものです。ドイツ語でのレッスンでしたが、父が通訳として付き添ってくれました。私も音楽的なことだったら、何を言われているのかはわかりました。レッスンに行くときには、楽譜の入った革の重い鞄を父が持ってくれたのですが、帰りは自分が持たなくてはなりません。叱られた日にはその鞄がさらに重く感じられました。父と並んで歩くこともできず、まさに「３歩下がって師（ではなくて父ですが）の影を踏まず」でした。玄関のドアを開ける音で、母はその日のレッスンがよかったのか、叱られたのか、わかったそうです。厳しいレッスンでしたが、日本の昔の先生のように叩く、などということはありませんでした。毎週、バッハの平均律は１曲暗譜で持って行かなければなりませんでした。小学４年生のときに第１巻は一通り終わっていたのですが、コハンスキー先生のもとで「バッハは大事だから」と第１巻と第２巻を３回は繰り返しました。後で人と比べましたら、コハンスキー先生のレッスンは曲数が多かったようですが、その時はそれで当たり前と思っていました。レッスンの前日に学校を休んで練習したり、レッスン当日に早退したりしたこともありますが、試験で悪い点は取らないようにしました。

親は私のピアノをほめたりしませんでした。だから自分が特別だと思ったことはありませんでした。でも漠然と、自分はピアノと一生付き合っていくのでは、と思っていました。

ステージで演奏する北川暁子

高校になって、言葉より音楽のほうが自分を表現できる、と感じました。それで今までピアノを続けてきているのだと思います。

コハンスキー先生に師事したいということで、大学は武蔵野にしました。演奏活動も始まっていたので忙しかったです。大学時代は作曲家の安部幸明先生のところに、友達を誘って和声のレッスンに通いました。機能和声から分析まで２週に一度、４年間通いました。バッハやベートーヴェンからワーグナー、ドビュッシーまでの分析も教わりました。大学の集団の授業と違って楽しかったです。ひとりひとりの音楽を尊重していただけましたから。

大学３年生のときに、コハンスキー先生はご病気でフランスにお帰りになってしまいました。４年生はドイツ人の先生について、卒業後は周囲のすすめでウィーンに留学しました。

二人の先生の教え～コハンスキー先生とハウザー先生～

ウィーンには給費留学生として行ったのですが、官費だけでは足りず、当時は外貨送金も制限されていたので大変でした。師事していたR.ハウザー先生も心配してくださり、２年目は先生に教えていただいた奨学金のためのコンクールに受かって奨学金をいただき、3年目は国際コンクールでいただいた賞金で生活しました。

ハウザー先生は紳士的な方でした。生徒の主張を認めて下さいました。一生懸命やってきたことであれば成果が出なくても怒らないけれど、サボったことはすぐバレて怒っていられました。才能があるのに怠けている子には、その子のプライドを傷つけないように廊下で他のクラスに行くようにと言い渡していられました。自分のクラスから追い出すだけでなく、他のクラスに行けるように、取り計らうところが紳士的だったと思います。ハウザー先生について、私は理屈で物が言えるようになりました。感情を押し付けてはいけない、ということを知りました。また、ウィ

ーンに行って、10 人生徒がいれば、10 人違うように弾くのがいい先生なのだと思いました。生徒を聞いて先生がわかるようではだめなのです。

（日本にいたときの）コハンスキー先生は、怒ると禿げ頭がゆでだこのようでした。レッスンを待っていると、前の人が怒られているのが聞こえるのですが、私のレッスンになると、必ず笑顔で握手をするところから始まるのです。他の人に対してもいつもそうでした。それが当たり前と思っていましたが、自分が教える立場になって。それが如何に難しいことか判りました。

東京芸術大学退官写真１：教え子たちに囲まれて

そして、コハンスキー先生はいつもこうおっしゃりました。「今はこれでいい。でも後もう２年経ったら弾いてごらん。」私がベートーヴェンのピアノ・ソナタの全曲演奏会を何度かやったのは、そうした教えからきているかもしれません。同じ曲を後でやると、その時気が付かなかったことがわかるのです。私はコハンスキー先生から、「考えるということ」を教えていただいたと思っています。難しい課題が出ても「工夫すれば弾けるのではないか」と考えるようになりました。弾き方が決まったのはウィーンに行ってからだと思います。

コハンスキー先生は大学３年のときに病気で国にお帰りになられ、ハウザー先生は留学中に病気でお亡くなりになりました。お二人とも習っている途中でレッスンが受けられなくなりました。私は帰国しても先生がいらっしゃらなかったのです。まさに孤軍奮闘でした。

まわりには理不尽に厳しい先生についてかわいそうだなと思う人がたくさんいましたが、私は、環境にも師事した先生方にも恵まれていたと思います。今も演奏活動を続けているのは、年と共に理解の仕方が変わり、年相応の演奏になったかな？と思うからなのです。そして演奏は生活そのものが反映すると思います。

日本人であること

私が日本人の先生についたことがない（注：小学校４年生までは日本人の先生）からなのかもしれませんが、「日本人であること」について考えることがあります。日本人は演歌のようなモノフォニーで音楽を捉えている、ということがあります。指は達者ですが、それに頼っていて、たとえばショパンの左手の和音がわからなくなってしまったりします。西洋の人は、ポリフォニーという感覚が身に付いています。和音の下から音楽を捉えています。日本人は教会音楽が生活と密着していないからかもしれませんが、そういうポリフォニーの感覚は、努力しないとついていかないかもしれません。

あと、なぜなのでしょう、日本人はアウフタクトとディミヌエンドが下手ですね。父もＮ響時代に指揮者にそこを注意された、と家に帰って言っていました。息が短いというか、フレーズ感が短いのでしょうか。クレッシェンドは上手なのですが、大きくなったところで終わってしまうのです。また、アウフタクトはその前の拍を勘定していないことが多いですね。音符しか読んでいないとそうなるのでしょう。

ピアノを学ぶこと

ピアノの勉強についてですが、先生は全て教えてくれるものだと思っている人がいます。先生は気持ちで教えてはいけないし、理屈で言わないといけないのです。生徒がその曲をどう感じるかに関しては自由ですから、こちらは自分の感じ方を押し付けられないのです。作曲家は偶然その音を書いているのではないので、なぜ「その音」なのか、必然性を考えなくてはいけません。

よく「その小節がシミで見えなかったとしたら、その作曲家は何の音を書いたと思う？」と聞くことがあります。そこがわかるように、作曲家の様式を学んでほしいと思っています。大学での勉強は、曲数を増やすことだけではありません。バッハとは、ショパンとはこういうものだ、ということを勉強するのです。作曲家の様式を知ることが大事です。

留学中にヨーロッパのやり方にカルチャーショックを受けている人たちがいました。「これではまだ（日本に）帰れない」と言っていました。自分のレベルでよいのです。様式がわからないでいると、いつまでもそういうことを言うようになってしまうのでしょう。

それからピアノだけ弾いていてはだめです。本を読んだり絵を観たりするのも大事です。感性を磨かなければ曲を理解できないでしょう。私は活字がないと生きていられません。

また、勉強の進め方ですが、チェルニーは必要悪だと思っています。普通の人はメカニックをつけるために必要です。チェルニーで和声感を養ってほしいです。１週間に１曲仕上げるつもりで、構造を早く理解し、暗譜するのです。そうして力をつけていきます。そうすると頭も回転するようになり暗譜も早くなります。暗譜は目的ではありません。それから先もあります。ひとつの達成です。１曲に１か月かけているようではいけません。また、バッハは常に弾くべきです。まだわからなくても、耳のために、ポリフォニーの感覚を養うために必要です。子供にシンフォニアは難しいと思います。インベンションの後には、私はフランス組曲を弾かせています。

室内楽のピアノ

東京芸術大学退官写真２　教え子たちと握手する北川暁子

室内楽のピアノですが、何と合わせるにも、まずピアノが他の楽器奏者をリード出来なければなりません。ピアノが一番音が多いのですから。ピアノを弾くだけで必死の方がいます。多少は遠慮しながらも主張すべきことは主張するのです。そして他の楽器に同じ音域があったら、そこは譲ります。ハイドンはそういうところをうまく作っていて、楽器同士で音域がかぶりませんが、モーツァルトのトリオはかぶることがあります。

伴奏であっても、ソリスティックな要素ができていないといけません。後からくっついていくわけではないのです。無難にしようと思うと音楽的に弱くなってしまいます。

人と合わせるときは、アインザッツだけ見ればいいのです。妹とは見なくてもわかります。リタルダンドもわかるようにやればいいのです。突然思いついてやるから、ついてこられなくなるのです。あと、無理に相手を見なくてもいいのです。どうやったら相手にわかるか、考えればいいのです。

個性とは～若い方々へ～

若い人は完璧でなくてもいいと思っています。そのときの最善を尽くせばいいのです。翌日にイメージが変わってもいいのです。楽譜に注意書きを書き込むときは、ボールペンではなく鉛筆で書いてほしいです。翌日にアイディアが変わって書き直す必要が出てくるかもしれないですから。そうやって変わっていくのです。常に考えていなければなりません。わからなくてもいいから、その時感じたことを正直に弾いてほしい。そういう意味で完璧でなくてもいいと思うのです。

また、個性ということを勘違いしている方がいます。人と違うことをやろうと思わなくてよいのです。意識的に、潜在的にそうしているのでしょうか。もともと全く同じ人はいないのです。人と人は多少違っているのです。もうそのちょっとの差が個性です。多少多少が違って大きく変わるのですから。

曲と作曲家に深く付き合ってほしいです。例えばシューマンだったら、シューマンはどう思ってこの曲を書いたのか、どのくらいクレッシェンドしたらシューマンらしいか、など、作曲家が考えたことを考えてほしいです。自分で苦労しないといけません。

今回の連載文はご本人のお話をもとに構成しました。インタビュアーとして、東浦亜希子（会員・ピアノ）さんにもご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます

（きたがわ・あきこ　ピアニスト：本会理事長）
（取材日 2013 年 2 月 27 日　新宿にて　文責：湯浅玲子）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

★フジコ・ヘミングの新 CD「Ave・Maria」発売。助川敏弥作品収録。

ブルガリアのヴァイオリニスト、ヴァスコ・ヴァッシリエフと競演。助川敏弥作品「ちいさき いのちの ために」ヴァイオリン版も収録。ブルガリアでの演奏会のライヴ録音。ほかに、ラフマニノフ、リスト、ベートーヴェン、ラベル・ブラームスなど。

以下の会社が販売取り扱い。
マザーアース株式会社
TEL:03-3455-6881
mail:mother-earth@yacht.ocn.ne.jp
108-0014 東京都港区芝 5-29-22-403
購入は直接申し込み。　　助川 敏弥

連載

音・雑記－ひなの里通信（57）

狭間 壮

ハグしても？

ハグしてもいいですか？とご婦人が言った。コンサートのあと、花束をさし出しながら。とっさのことであった。異存はない。で、そういうことに。

コンサートでは、たまにそんなめぐりあわせもないではない。が、それらはほとんどの場合、いきなりとか、なんとなくの呼吸で、という案配で。だから、「いいですか？」などと律義に問われると、一瞬返答に窮する。照れる。

客席からは、“やんや”の拍手。いや久しぶりで・・・、などと言い訳をする。しかしこの本日の“やんや”には、ほかに理由があったと思われる。その事情には、少しの説明が必要になる。

このコンサート、地域の公民館主催のもので、その公民館を交流の場とする住民を対象とするものである。講演つきコンサートを依頼されたのだ。参加者は120人ほどだったが、小さなホールはそれでも一杯、老幼男女、ご近所さんや多くは顔見知り。

面と向かえば、演奏者からは120人の様子はよく分かる。その反応を確かめながら、話も演奏もすすめる。様子で曲目を変更することもある。客席とともに作るコンサート。明るい土曜日の午後のにぎわい。

それで、前から5列目の左端のご婦人が気にかかる。俗にいうところの前期高齢、の半ばあたりか・・・。にこにこのえびす顔で聞いている。窓ぎわの陽の光のせいか、つやつやと輝いて見えるのだ。

えびす様の笑顔を曇らせてはならぬ、私はあれやこれや張り切り1時間半を終える。

ここで、先ほどのご婦人の登場である。この人こそが、えびす様の笑顔で聞いていた前から5列目の左端のご婦人。

女性だから、えびす様ならぬ弁天様としようか。この七福神の御一人弁天様が、琵琶のかわりに花束かかえ、ゆるりと出てこられた、と想像してほしい。

ふくよかな弁天様が、にこにこと目の前にあらわれたのだ。ありがたい。

狭いホールの小さな低いステージであるから、ステージに上らずとも、たやすく花束の受け渡しはできる。おまけに私は、車椅子に座っているので、そのご婦人とは、ほぼ同じ背丈に。

花束を受けるのは容易。しかしハグとなると、これがちと難しい。私は車椅子を斜めに向きをかえ、弁天様のさしのべる腕の中に身を委ねたのである。相手は弁天様。ありがたくもおそれ多いことなのだ。

しかし、私はといえば布袋（ほてい）様体型を車椅子に押しこめている。布袋と弁天のハグ。それは、右半身（み）をお互いが受けとめるという図となり、折しも春場所の様相を呈するということになった。

車椅子の車輪なども邪魔になり、お互いの背中までは手が届かず、何とも達成感のないハグである。せっかくの弁天様の思（おぼ）し召しもフイになってしまった。まったく世の中、なにが起るか分からない。こんな事ならダイエットに励んでおけばよかったのだった。

座ぶとんこそ飛ばなかったものの、そんな様子に“やんや”の拍手が会場から湧き起こったという次第。気のおけない地域の、身内に対する親しみから生まれる情である。

ところで「ハグ」という言葉。若者専用だと思っていた。私ども同年輩でも使っているのか。70歳になるこの時まで言われた試しがない。

辞書にてあらためてみる。ハグ（hug）＜名・自他サ変＞とある。動詞として使う時は、サ行変格活用の、立派な日本語として認められているのだった。＜抱きしめること。また挨拶として抱き合うこと。―明鏡国語辞典―＞とある。

抱いてもいいですか？の語感より、ハグしても・・・？の方が、気楽にうけとめられる。欧米の日常が言葉とともに多くの日本人に、いつの間にか定着していたのかもしれない。頭の切りかえの必要がありそうだ。

さて本日のコンサート。地域の公民館の行事予算をやりくりして開かれた。館長の配慮が行き届き、アットホームなものになった。こんなコンサートのあとは、しばらく楽しい。

講師謝礼をいただく。「わずかで・・・、それに今年からこんな税金もつきまして・・・。」と渡された明細書。「復興特別所得税」が加算されてあった。東日本大震災、あれから2年の歳月が流れた。被災地では未だ31万5千人もが避難生活を送っている、と報道が伝える。領収書に署名捺印しながら、東北の地に思いを馳せる。復興の春はまだまだ遠い。

コンサートのあたたかく幸せな余韻をいっぱいにつめて、いただいた花束からは春の笑みがこぼれる。それをたっぷりと身に浴びて、精一杯の応援を彼の地に届ける力にかえたい。前向きな力が湧いてくる。三寒四温ゆきつもどりつ、信州には遅い春がやってきた。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【切り絵】武田 光弘（たけだ　みつひろ）

名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 38 回〕

暗号じみた仕掛けがある曲

一見とっつき難そうに思われるクラシック音楽も、それを書いた作曲家の立場になって聴いてみると、別の楽しみが沸くものである。一般うけのする曲を書いてやろう。難解な曲を書いてやろう。いや、ギョッ！とする曲はどうかな、とまあその辺までは作曲家だったら誰もが考えそうだが、作品そのものの響きを追求するだけでなく、時には手段であるオタマジャクシ(音符)の配列や展開にも興味を持ち、遊んでみたり仕掛けをしてみたりと、そんなことをやる作曲家もいそうな気がする。私が作曲家だったら、絶対やる！――そう思う人も、いるのではなかろうか。

実際、シュトックハウゼンとかクセナキスといった 20 世紀の作曲家の楽譜を見ると、直線やら曲線・点などが入り混じった、抽象画とも設計図ともとれる、従来の楽譜のイメージとはおよそかけ離れた、ふしぎな印象を持つことになるだろう。すでに実行している人がいるのである。

調性破壊から現代・前衛へと進んだ 20 世紀以降では、そうした試みも珍しくなくなっているけれど、それ以前、私たちがよく聴く 19 世紀にも、じつはそうした音符いじりをして曲を書いた人がいるといったら、誰のことか、何という曲か、見当がつくであろうか。

それはロマン派の作曲家、ロベルト・シューマン（1810～56、ドイツ）と彼のピアノ曲「謝肉祭」「アベッグ変奏曲」のことなのである。特に「謝肉祭」には、彼の実らなかった恋の思い出が秘められている。

シューマンは、南ドイツ、サクソニアのツィヴィカウという町に生まれた。本屋を経営していた父親の影響を受けて幼い頃から詩や劇に興味を持つ一方、音楽にも大いに才能を示す。16 才の時に父親が亡くなると母親の希望に従ってライプツィヒ大学の法科に入るが、法律よりも文学や音楽に傾倒し、知り合った名ピアノ教師フリードリッヒ・ヴィークーに師事することになる(20 歳、1830)。ここには後に結婚する娘クララがいたが、その前に、同じ弟子だったエルネスティーネ・フォン・フリッケンという 17 才の女性と、シューマンは恋をした。ボヘミアとザクセンとの国境に近い町アッシュから来ていたエルネスティーネは美しく聡明だったが、父親のフリッケン男爵は 2 人の仲を知るとなぜか猛反対！娘をアッシュに連れ戻してしまった。諦めきれないシューマンは後を追ってアッシュまで行くものの、どうにもならず、やがて彼女との思い出を一つのピアノ曲に表わした。

それが「謝肉祭」作品 9（1835）というわけだが、どこが音符いじりの仕掛けか

というと、副題に「4つの音符による小景」とあるように、これはイ・変ホ・ハ・ロの4音を基本にして書かれているのである。ドイツ語の音名で表わすとA・Es(S)・C・Hすなわち ASCH(アッシュ)となり、彼女の住む町の名となる。自身の名 Schumann の中にも入っているというわけで、忘れられない名を刻んだこの曲によって未練を断ち切り、次なる師の娘クララとの恋に進んだというわけなのであった。曲の方は、「前口上」に始まり、「ピエロ」「道化役者」「高貴なワルツ」・・・などと続く12曲による奔放で幻想的なもの。第8,9曲の中には「スフィンクス」と題するいたずら書き(演奏しない)が加えられている。

シューマン夫妻（右：クララ）

もう一つの「アベッグ変奏曲」は、それより前の1830年、シューマンが一時ハイデルベルク大学へ移って法律を学んでいた時、友人が恋をしたメタ・アベッグ（ABEGG＝イ・変ロ・ホ・ト・ト）という女性の名を、同じように音に置き代えて変奏曲にしたもの。出来あがった作品はしかし、パウリーネ・フォン・アベッグという架空の女性に捧げられている。

2曲のほかにも、じつはクララと結婚（1840）し、翌年に生まれた長女マリーが7才になった時の誕生祝いに贈った「子供のためのアルバム」(全43曲)の第41曲「ノルウェーの歌」にも、同じような仕掛けが施されている。「Gへの挨拶」と但し書きのあるこの曲は、友人でゲヴァントハウス管弦楽団の副指揮者をしていたニルス・ガーデ（1817～90 GADE=ト・イ・ニ・ホ）を織り込んでいて、素朴ながら魅力的な曲。さらにまた専門家の分析によると、ハイネの詩による有名な歌曲集「ミルテの花」(全26曲)の第7曲「蓮の花」の冒頭も。クララ（Clara）と読めるとか。ともあれシューマンという人、よほど暗号じみた遊びが好きだったらしい。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【【連載】　**音盤奇譚**　板倉 重雄

第 43 回

ビーバーの無伴奏ヴァイオリンのためのパッサカリア

3 月 11 日、若くしてベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団と読売日本交響楽団のコンサート・ミストレスを務める才媛、日下紗矢子のリサイタルを聴いた。バッハのソナタ　ホ短調で始まり、ベートーヴェンの《クロイツェル・ソナタ》、メシアンの《主題と変奏》、そして最後をバッハの《シャコンヌ》で締めくくるプログラムは、ヴァイオリン音楽史 300 年を一巡りするような内容だったが、アンコールでビーバー作曲の「ロザリオのソナタ」～《パッサカリア》ト短調（1674 年作）が取り上げられ、少し驚くとともに、深い感動を覚えた。ビーバーの《パッサカリア》は、バッハが無伴奏ソナタとパルティータ集（1720 年作）を作曲するにあたり、ピゼンデルの無伴奏ソナタ（1716 年作）とともに研究した作品と言われ、《シャコンヌ》への直接的影響が指摘されている。ビーバーの曲集には、それぞれキリストの秘蹟が標題として与えられており、《パッサカリア》は「守護天使」とのタイトルが付いている。彼女は東日本大震災での犠牲者への追悼として弾いた。彼女はモダン・ヴァイオリンを用い、バロック奏法を参考にしながら、実に柔らかく、強く、しなやかな音とリズムで、ビーバーの哀切な旋律線を、弧を描くように描き出していた。会場の浜離宮朝日ホールに天使が舞い降りて、寂しくも優雅な舞を披露しているようだった。

この感動を反芻したくて、帰宅して一枚の LP を聴いた。マックス・ロスタルが 1950 年頃に録音した、やはりモダン・ヴァイオリンによる《パッサカリア》である。入手したのは約 20 年前で、その頃愛聴したレコードだった。彼女の演奏に較べ、リズム表現がかっちりしていて、ほの暗く柔らかい音で弾かれた求心的な演奏である。確かバッハのソナタがカップリングされていたな、と思って曲目を見ると、何と今

日の演奏会と同じソナタ　ホ短調である！　私はヴァイオリン演奏史も一巡りしたような感慨に襲われたのだった。

●日下紗矢子／リターン・トゥ・バッハ［シャコンヌ、ソナタ　ホ短調 BWV.1023、協奏曲第 2 番ホ長調、アリオーソ、リュートのための前奏曲（コダーイ編）、G 線上のアリア

　日下紗矢子（vn）オリヴァー・トリエンドル（p）ベルリン・コンツェルトハウス室内管弦楽団

［日本コロムビア　COCQ84998］（CD）　【写真：前ページ】

　2012 年デジタル録音。バッハのヴァイオリン曲を後世の編曲物も含めて幅広く集めたアルバム。彼女の演奏も時代考証からモダン楽器まで、演奏の歴史を総決算し、未来の演奏様式を志向したようなところがあり、興味が尽きない。アンコールで披露したビーバーの《パッサカリア》はまだ録音していない。

●ビーバー：無伴奏ヴァイオリンのためのパッサカリア●バッハ：ソナタ　ホ短調●タルティーニ：協奏曲ト短調

　マックス・ロスタル（vn）フランク・ペレグ（cemb）アントニオ・トゥーサ（vc）ワルター・ゲール指揮ヴィンテルトゥール交響楽団

［米 Concert Hall　CHS1174］（LP 廃盤）　【写真：上】

　1950 年頃のモノーラル録音。マックス・ロスタルはカール・フレッシュの高弟で、自身もヴァイオリンの名教師、著書や校訂譜も多数ある理論家だった。英 SYMPOSIUM から CD 化されたが、現在は廃盤らしい（SYMPCD-1079）。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

私と、ラジオ・ドラマ

連載第10回　　作曲　助川 敏弥

挫折と再起動、痛恨の青春記

本誌の前号に私は「未来の音楽人へ」と題するリレー連載文を書いた。自分の人生の回顧と反省、そんなことから後の世代への参考になるであろうことを期待する文であったが、いまこの連載、「ラジオ・ドラマと私」にも関連することがある。そのことを作曲の道を進む後進への経験の記録としてぜひ書いておきたい。一色次郎さんの書き下ろしの話から脱線するが、脱線ついである。

「未来の音楽人・・・」の中で、私が作曲を始めた動機は、文学や詩作ではなく工作であると書いた。その私が最も強い影響を受けたのは、柴田南雄さんの「バルトーク研究」であった。月刊誌「音楽芸術」に連載されたものである。音楽を情緒的なものとして扱うのではなく、知的な構造物として見る。あたかも、器械の構造を解明するように研究し論じていく。知性的で好奇心を刺激するその方法の魅力は、戦慄的といってもよい衝撃を私にあたえた。音楽をこのような角度と方法であつかうことをこの文ではじめて知った。芸大二年生の頃だった。20歳を少し過ぎた頃のこういう刺激は絶大なもので、知性以上に精神全体を震撼させた。戦前の雑誌に「音楽研究」という季刊誌があった。その雑誌にも「バルトーク研究特集号」というのがあった。人から教えられて、手に入れた。昭和13年刊行のもので共益商社書店発行となっている。「バルトーク」ではなく「バルトック」となっている。しかし、この雑誌でも、当時としては立ち入った研究であったのだろうが、柴田先生の研究のように工学的というほど徹底的な方法のものはなかった。私の最初の大規模作品、「オーケストラのためのパッサカリア」は、この教化の結晶であった。日本音楽コンクールの応募作品で思いもかけず一等と「特賞」という大当たりとなった。ここまでは、私にとって音楽の工学化という最初の段階であった。それからはさらに、バルトークそのものへの思想的崇拝へと進んでいった。思うにこの時期は青春期の観念的活力が最も旺盛に活動する時期であるのだろう。何をやってもバルトークの世界への心酔であった。芸大卒業の直後あたりまでこの状態が続いた。ところが、この辺から人生の最も困難な課題が次第に頭をもたげてきた。自分自身の感性が次第に目覚めてきたのである。それはバルトークのような激しい不協和音の世界ではなかった。何かが違う、これは自分のものではない、という不気味な声が心の深い所から聞こえてきた。そうなると混迷が次第に全身にひろがる気配となってきた。

作曲すなわちバルトークの世界と思っていたのに、それが違う。となると、それでは何が自分の音楽か?　ゼロからの再出発をしなければならない。無限地獄、虚無地獄への転落であった。いままで自分が作曲と信じてきたものはなんだったのか?

思うに、学生運動、全学連、全共闘、などなど、政治運動に夢中になっている若者たちもこれと似た軌跡を踏んだのではなかろうか。カロッサのいう「青春の眩惑」である。

こうした一時的失語症への転落の時期にまた、いい仕事が相次いでやってくる。人生とはそういうものだ。NHK からの選ばれた名誉ある仕事であった。失語症不調で全部三振してしまった。こうして私の暗黒放浪の時期が始まった。

この混迷が終って自分の作風がおそれなく再起動したのは 38 歳の時だった。この年は四作品を次々と初演した。評論家からは、作曲をやめたかと思っていたらまた始めた。何が起こったのだろう、などと書かれた。

こうした暗黒放浪の時代からの再出発の時期、作品沈黙の時代に自分の音楽の再構成と再起動に役立ったのがラジオ・ドラマの仕事の場だった。ゼロから自分の感性を問い直す、その場であった。短い音楽で、実験的なもの、試み的なものも許される。ほんの短い BGM かブリッジでも、自分の感性を探る深刻な作業の場である。となれば、経済学的な費用対効果としてははなはだ割の合わない労働となるがこれは仕方ない。どんな吹けば飛ぶような小さな仕事でも、自分にとっては、自己発見、自己再構築の深刻にして貴重な作業の場であったのだから。経済効率などはどうでもいい。いや、経済的に見ても行く末はおおきく還元される高価な作業なのだから。

こうして次第に見えてきた自分が納得する自分本来の音楽はバルトークとは似ても似つかないものであった。不協和音の世界ではない。繊細な協和音の世界、それにハープやチェレスタが微妙に彩色する繊細な世界であった。これがまた軌道に乗るまである期間がかかった。かくして”バルトークとは遠くなり”にけりとなった。いま思い返しても苦渋呻吟の時代である。この過程を続け重ねることによって、自分の「顔」が見えてきたのである。

創作とは自己発見の場である。自分でないものを自分と思い込み、道を誤る、そんなことを人はするものである。この間のタイムロスは痛恨の記憶である。私がいま、高齢になって新作を次々書いている動機はこの時期を取り戻そうとする私の意地である。身体と命が許す限り、自分の過去への報復をなしとげたい。

（すけがわ・としや　本会　代表理事）

電子楽器レポート・連載５

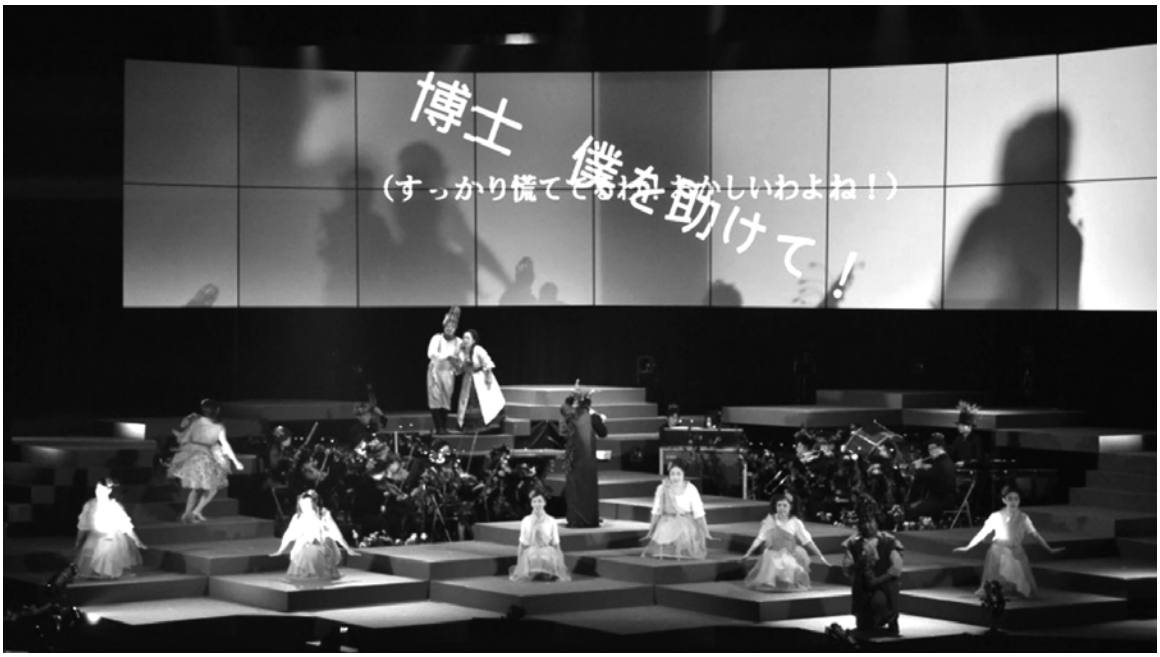
関西二期会「愛の妙薬」

ハイブリッドオーケストラによる斬新的なオペラ公演

研究　阿方　俊

今、日本でもっとも活動的なオペラ団の一つといわれている関西二期会が、ドニゼッティの″愛の妙薬″を「字幕」「演出」「オーケストラ」の３点で斬新的な公演を行ない今後のオペラ公演に一石を投じた。3 月 9、10 日、大阪国際会議場ホール。一般的に字幕といえば歌詞の翻訳を舞台の両側などに映し出して筋の理解に役立てるという脇役的存在であるが、ここでは脇役を飛び超えて、写真のように字幕自体が映像として舞台の演技スペース上部に映し出され、それ自体が歌手やオーケストラ、照明と並ぶ主役級といえる重要な役割を担っていた。清水光彦事務局長によると、このような字幕自身が立体的動きを伴って用いられる方法は、オペラでははじめてのことではなかろうかとのことであった。

演出は、″新演出！演劇界とのコラボレーション！″のキャッチフレーズのもと、関西の小劇場界で活躍する演出家、ウォリー木下が登用され、オペラの一般的イメージである「ストーリーがわかりにくい、長い、眠い・・・」といったものを一新するステージを創り上げていた。また写真からもわかるように、後述のコンパクトなオーケストラであるハイブリッドオーケストラをステージ上に乗せ、ある時は奏者が立って演奏するなどオーケストラピットでの演奏では考えられない見せ場をつくっていた。いわゆるホールオペラの発展したものといえる。このコンパクト化はコーラス（村の若者たち）にも応用され、6 人の女性ボーカルアンサンブルに置き換えられていた。ステージ上は大道具といったものは一切なく、上手（かみて）、下手（しもて）と中央で繋がる階段上に平台を積み上げるシンプルなものであった。



（字幕用大スクリーンとステージ風景）

ハイブリッドカーでおなじみのハイブリッド（hybrid）の語義は、異種混合という意味であり、ハイブリッドオーケストラの場合はアコースティック楽器と電子楽器によるアンサンブルを指す。このようなアンサンブルは小編成であってもオーケストラ的響きを得られることから編成の如何に関わらずハイブリッドオーケストラと呼ばれることが多い。ここでのアンサンブルは 16 名（エレクトーン×1、弦楽器×10、管打楽器 5）編成であるが、ハイブリッドオーケストラとしては規模の大きいものに属する。会場では少なくとも 30 名編成以上のオーケストラの響きとなっていた。

（左側後ろ向きは指揮者。右正面向きがエレクトーン）

このオペラ本来の楽器編成は、フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ホルン 2、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニー、大太鼓、ハープ、弦 5 部の 2 管編成のオーケストラに舞台上にコルネットと小太鼓、バンダが加わる。

以上の編成を今回のハイブリッドオーケストラでは管楽器奏者、フルート、オーボエ、トランペット、トロンボーン各 1 名であったため、かなりの部分のハイブリッド化にエレクトーンが関わったことになる。この関わりについて、エレクトーンを担当した芦谷真由美さんの話によると次の 4 つであった。

① エレクトーンが担当した楽器は、クラリネット、ファゴット、ホルン、ハープ
② それに加え、2 管編成のフルート、オーボエ、トランペット、トロンボーンのハーモニー強化。
③ 編曲されたものを演奏するのでなくスコアを直接みてフレキシブルに対処。
④ エレクトーン用のスピーカーは 1 台のスピーカーを直繋ぎ。

打ち合わせ中の金正奉（指揮）と
芦谷眞由美（エレクトーン）

このようなハイブリッドオーケストラにおけるエレクトーンのあり方は、今後の実践研究に待つところが大きい。

指揮の金正奉氏は初めてエレクトーンと合わせた時に正直なところどうなるかと心配したが、合わせを重ねるにつれ、不安は一掃され今では、新しいサウンドに満足していると語っていたのが印象的であった。来年もハイブリッドオーケストラによる公演が予定されているそうである。来年度の更なるチャレンジに期待したい。

（あがた・しゅん　本会研究会員）

＊お詫びと訂正：3 月号、連載-4 の 1 行目「平成音楽大学サティライトスタジオ」は、「平成音楽大学サテライトステージ」です。

福島日記（19）　作曲　小西 徹郎

この４月から私の学校での勤務体制が変わった。この４月からは非常勤講師ではなく「特別講師」として年に何度かの特別講演を行うことになった。私は日々学生と共に「並走」していたかった。学生と共に走る、これはたとえば放課後でのセッションであったり制作につきっきりになったりしながら更にレベルアップをはかる、そういうものである。国際アート＆デザイン専門学校の方針として「落ちこぼれを作らない」「皆が仲良く一緒に」そのために授業のレベルを下げて「皆がついてこれる」カリキュラムにする、ということで東京からきているプロの講師ではなく基本は地元のアマチュア音楽家の方々が非常勤講師として「ベーシックトレーニング」を行い、私のような東京からの講師は年に何度かの特別講演のみとする、ということになった。私は今後も日々学生と「並走」していく予定であったのでいささか残念である。ベーシックトレーニングはアマチュアでも教えることができる、この視点は明らかに大きな誤りであるが、方針としてそうなったのならいたしかたないだろう。他の地方の専門学校や短大などにおいても、地元の TV 局の人間が映像制作の講師として勤務しているらしいが、映像ソフトひとつ満足に使うことができない、そういう地方の地元の講師が地方の大学や短大、専門学校の講師をしている、そういう事実はたくさん耳にする。学生一人一人の特性を見極めてどういう方向に進むのか？就職はどうするのか？そういうことを考えて講義をしてきたし学生と向き合ってきた。私のネットワークも無償で与え企業への就職のアプローチもしてきた。非常勤講師だから講義が終われば「はい、終わり」ではなく彼らに真剣に向き合ってきた。より具体的に単にアイデアではなくそこから踏み込んでもっと更に具体的に指導し、自分の仕事に学生を巻き込み、それが学生の実績としてクレジットされる、そんなことをずっとやってきた。そこは無償で行ってきた。それは、今後も学生と「並走」していくと思っていたからだ。

先月、卒業式があった。グレーな状態で卒業していく多くの若者たち。せっかく入学してきたのに、せっかく私が持つたくさんのネットワークを駆使してチャンスを与えてもそこに踏み込む勇気がなかった若者たち。「講義が難しい」とイヤートレーニング、社会に出るための講義、企画書作成の授業、私の講義に対し学校にクレームをあげた若者たち。そのクレームをもとに講師キャスティングの際に引っかかったのだろうと思う。入学者数獲得のためにはレベルを下げて、厳しさを排除して皆が楽しく２年間を過ごせる、という学校の方針は仕方ないかもしれない、ただ、レベルを下げて専門家になるためのスキルを満たすことができないままに無理やり卒業させて本当に社会に出ていけるのだろうか？その前に企業は学生をとってくれるのだろうか？本当にプロの現場でやっていけるのだろうか？

たとえば、「表現」というものひとつにおいてもそこには人として深く追究していかなくてはならないことが非常に多い。よくワークショップなどで身の回りにある様々なものを表現していく、ということをやっている。その表現の中にあるその人その人の特性がたくさん見えてくる。そこから向き不向きを見極めることができる。そして表現に辿り着くプロセスが一番大切だ。私はこのことも自身の講義に加えてきた。何故なら、どんなに音楽をクオリティ高く作ることができてもイマジネーションの根幹が成長しない限り、クリエーションも芸術性も高まるはずがないからだ。「歌う」「奏でる」とはいったい何なのか？

それは音楽に限らず美術においてもまったく同じである。「歌う」「奏でる」ピアノの鍵盤に指をおく、そこから先に生まれてくるものへの高揚と期待、そこにはじめて感動が生まれる。こういうことを年に数回の特別講演の場で何がいったい彼らのためになるのだろうか？日々共に走りながら、学生と並走していることが何よりも彼らの財産であるはずなのに。

そんな中、うれしいこともあった。以前より念願していたWasabi Music Entertainment.が一般社団法人として登記しスタートした。そこにもまだ福利厚生などの問題点はあるが早急に解決していきたいと思う。私は(社)Wasabi Music Entertainment.の理事として今後も若手と活動を行っていくことになった。Wasabiについては今後も心血を注いでいくだろう。

（こにし　・てつろう　本会理事）

挿絵：前川久美子（まえかわ　くみこ）山口芸術短期大学 在学中

若い会員は語る（その２）－1

ゼロからスタートして音楽の道に入って

作曲：小西 徹郎

若い会員として語る。私は青年に比べればそんなに若くない。ただ、人としてはまだまだ未熟で鍛錬と精進をこの先もずっと積み上げ続けなければならない身である。４４歳という何とも中途半端な年齢ではあるが伝えたいことを書き綴ることとする。

私は音楽大学の出身でもなく、専門教育をしっかり受けた者でもない。大学は地方の小さな経済大学、私は志を持って経済や経営を学んでいたわけではなかった。どちらかというと「大卒」の資格があればいい、そういう思いだった。ただ、当然音楽で生きて行きたいという思いは幼少の頃からあり大学卒業後は就職せずにプロの道を歩もうとしていた。クラシックではなくポピュラーミュージックの世界でだ。

まずは何とか音楽業界に入り、音楽にまつわる仕事をしながら活動を、と考えていたが音楽業界はとても敷居が高く､実力のない私は仕方なく一般企業に就職した。入社して１０年が過ぎた頃、インターネットの普及により私は当時音楽を目指していた友人たちを検索するようになった。「みんなどうせ音楽なんて趣味になってるよな、プロになんてなってないだろう」そう思っていたら、なんと！かなりの確率で友人たちは音楽業界で大きな仕事をしていた。このことに私は衝撃を受け「サラリーマンなんかやってる場合じゃない！アジやサンマ、漬物、豆腐を売ってる場合じゃない！！」と、その３年後１３年勤務した会社を退職し退職金で３５年の住宅ローンを完済し無理やり音楽活動に入った。何もコネクションもなくまったくゼロからのスタートだった。

■選択肢

よく進路決定の際に多くの人は選択肢を持っている。確かに選択肢は多くあったほうがいいだろう、リスクを避けられる。だが私は今まで選択肢を持ったことがない。卒業したら音楽活動をすることしか頭になかった。だが実力がなかったから就職するしかなかった。就職すべきか、それともプロを目指すべきか？そんな選択肢はなかった。常に道は一本であとには戻れないのである。選択肢を持っていると迷いが生じる、迷いが生じれば信念は貫けない、だから私は選択肢を持たなかった。中途半端にしたくなかったからだ。

■仕事をする、ということ。

就職した会社は「セブン＆アイ ホールディングス」ここで私は食品、食材の販売とマネジメントを行ってきた。当時、音楽は趣味としていくしかない、そう決めていた私は仕事に没頭した。とても厳しい会社で「趣味を持つ」ことさえも冷ややかな目で見られる、そういう社風だった。その中で会社内にクラシック音楽のサークルを作ったりして活動もしていたが長時間勤務がずっと続き睡眠時間２～３時間の生活が身体にしみついた。可能な限り毎日和声をやっていた。その時間が１日１時間とれればまだいいほうである。仕事に没頭するようになって私は販売が好きになった。マネジメントは得意じゃなかった。販売で全社１位になることが楽しかった。商品を売るために考えることが企画することが楽しかった。上司との距離感や仕事のコツ、所謂「サラリーマン道」を叩き込まれた。

会社を退職後、音楽活動をしながら一時路頭に迷ったが、仕事が増えてくるようになってほっとしていた。最初は増えていく仕事をこなしていくのがとても面白く、プロデューサーとのやり取りやオーダーに応えていくことが楽しかった。だが徐々に仕事が減っていった。営業不足だったのだ。このあたりから「サラリーマン道」が甦りはじめた。音楽やアートを売る、ということ、また、仕事をいただくのではなく仕事を創出（企画提案）していくことに力を入れ始めた。業界と業界をブラッシュアップ、マッシュアップすることでそこに活路を見出す、そういう仕事の仕方に変えていった。舞踊と音楽に始まり美術と音楽、またカテゴリーの交差、「交差」に力を入れてきた。そのことが今につながっている。

会社員経験、下積みから中間、管理職、人・モノ・金を扱うことは専門教育の現場においても大きく役立っている。良い音楽を作る、それだけでは芽が出ない。そこから先が闘いである。継続・発展させていくことが一番困難なのだ。会社は常に営業数字が永久に右肩上がりで推移していくことを命題としている。そうでなければ会社を存続させることができないからだ。こういうビジネス感覚やマーチャンダイジングすることを若手音楽家、演奏家の方々にも身につけるようにがんばっていただきたい。そのことが音楽で生きていくための大切な要素になってくると思うのだ。

ただ、勘違いしてはならないのは「売れるもの」を作ったり演奏したりするのではなく「売れるものとは何か？」をしっかりとリサーチし把握し、その上で「良いもの」をつくり、演奏し「良いものが売れるためには？」を考えマーチャンダイジングとして打ち出していくことがとても大切であり重要である。その連続、その「ネットワーク」が文化を作っていくのだから。

（こにし・てつろう　本会理事）

若い会員は語る（その２）－２

若手演奏家が活動していく為に

声楽　湯川 亜也子

若い世代の演奏家が自立していく為には、何よりもまず様々な舞台経験が不可欠であろう。

しかし、例えばオペラ歌手を目指す声楽家の多くは、数あるオペラ団体のいずれかに所属し、配役・出演を待つが、まず若手の歌い手が初めから主役級の配役を約束され、コンスタントに出演出来ることはごく稀である。多くの場合、小さな役柄、脇役などを与えられる事さえも難しい上、生活と両立しながら歌手としての活動を継続する事は困難な場合も少なくない。そのような状況下、地道な下積み時代にいかに自分の特性を把握し、それを生かし得る精神的、音楽的、技術的な面を磨いていけるか、強い信念を持ち続け、様々な可能性を切り開く土台を築いていけるかが課題となるだろう。

また、歌曲の世界においても、例えばリサイタルを開催するにあたり、まずプログラムを組める程のレパートリーがあるか、そしてそれらを音楽的にも技術的にも隈なく歌いこなせるかどうかという、何よりも歌い手自身の一層の精神性の深さが求められる。もちろん運営、経済的な面においても、知識を深め、経験を重ねる必要がある。

いずれにしても、音楽の内容理解、文化や歴史、それらを通した精神性をより深めていく為に、またそれらを自ら演奏の場に繋げる為に、語学力とコミュニケーション能力を身に付ける事が最も重要な要素の一部として挙げられるだろう。

先日、当会主催で開催された「第５回フランス歌曲研究コンサート」においても、運営面・演奏面共に舞台経験の浅い学生だけでは解らず、深められずに終わっていたであろう事も、師の秋山理恵先生にもご出演を頂き、一つの舞台を作り上げるという過程をプロの演奏家の間近で学ばせて頂く機会を得て、あらゆる面において不可欠な語学力とコミュニケーション能力の大切さ、必要性を改めて実感した。

こうした様々な演奏会の企画、運営、出演を通しての経験を生かし、語学力・コミュニケーション能力を深め、今後更なる活動に繋げていく為にも、国内外のコンクールを登竜門として、その時々の実力を試し、研く舞台経験を自ら求め、投資して行かなければならないと考えている。

（ゆかわ・あやこ　本会　声楽青年会員）

コンサート評　日本音楽舞踊会議 2013 年 2 月上演
「動き、舞踊、所作と音楽　～その２」

２月１８日所見、会場；すみだトリフォニーホール

国枝 たか子

１．アラブ音楽とベリーダンス

モハンマド・アブデル・ワハブ作曲の「イブンエルバラッド・祖国の息子」はウードの演奏で始まった。中近東でポピュラーな弦楽器、日本の琵琶に似た形だが音色は異なっている。日本の邦楽器を聞きなれた私たちには、どこか不思議な音色で胸騒ぎを感じる。弦の響きが木霊して四方へ伝達されていくのが分かる。ミステリアスな、エキゾチックな、ちょっと危険な色合いの響きである。

やがてウードにレクが加わると急に派手な曲調に変わった。歯切れの良いリズム、メリハリのよいフレーズが立ち現れた。レクはタンバリンに似た形状の打楽器である。これを山宮英仁が苦味走った表情で曲の終りまで演奏するのが、パフォーマンスとして興味深い。このようにウードとレクが刺激しあいながら、テーマの音楽を形づくり観客を楽しませてくれた。観客は血管や関節の節々が、それぞれ動き出してくるような感覚を体験した。自分の身体がひとつのまとまりであったのは過去のことであり、ウードとレクに誘われて湧き出す身体感覚は、関節ごとに勝手に動き出しているリズミカルな生命体である・・・？というような不思議な体験・体感である。しばし心地良い内的世界を体験させてくれた。

続いて「エンタウムリ・あなたは私の命」が演奏された。ベリーダンスの yasuko の出演である。日本の邦楽と舞踊の関係に慣れている観客には、いま一つ違和感があるようだ。ウードの演奏家とダンサーの関係、立ち位置がよく判らないところがある。ベリーダンサーは観客に身体を晒す時、音楽とダンスと観客の距離をどのように測っているのだろうか？素朴な疑問が湧いた。とはいえエキゾチックな動きを撒き散らして、リズムとメロディにアグレッシブに対応しながら、観客に異文化世界を提示してくれた。ウードの演奏は荻野仁子。

２．ピアノ・デュオによるミヨー作曲とダンス

はじめの演奏はミヨー作曲のポルカ（0ｐ。１６５ｂ）である。ポルカの軽快な気分が演奏会場いっぱいにふり蒔かれた。明るい躍動的な楽天的な雰囲気である。ポルカ特有の気分のほかに、ミヨー独特の外国のダウンタウン風なちょっと猥雑な何かが、まるで胡椒ののように効いて混じっている。やや技巧的な曲目である。ピアニストは戸引小夜子と小崎幸子。

二曲目の「スカラムーシュ」では、世紀末のような変化の時代を音楽が映し出して、クセのある彩が色濃く表現された。これは演奏技法というよりは作曲に原因する独特の味わいである。パーカッション（谷本祥子による）とダンスが加わるとピアノ・デュオはいっそうお喋りになった。ゴチャゴチャした下町の、陽気だが貧しさや犯罪の種を内包する少しいかがわしい街に生きている人々の愉しみや、商売や、笑いや涙が表現された。ダンスの矢萩もえみは綺麗な身体に恵まれていて、この陽

気さにまかせて素直に踊っていた。サンバのステップを基調にしながらターンを繰り返してサンバのスピード感を出そうと試みた。踊って楽しむダンスである。その点、ダンサーに期待している観客層には物足りなかったかもしれない。ステージ上の舞踊としては、両腕や指の繊細な動きにまでも「意味する何か」を読み取ろうとするからである。あまりに上肢の動作が単純すぎて・・・という反省点が残った。音楽と舞踊のマッチングという観点からみれば、フィリピン・セブ島のダンスまたはブラジル民族舞踊の専門ダンサーの起用も考えられよう。

３．舞踊と電子音響のための「ミステリーゾーン」

白いフォーマルドレスを着た美しい女性がステージ下手のスポットライトに照らされて浮かび上がると、やがて音楽が緊張感を奏で始める。この主人公に何か劇的な事が起こりつつあるらしい。作曲は中島洋一、振付は井上恵美子。ダンサーは天野美和子、津田ゆず香、小野めぐ美、柴野由里香、小出里英子、江上万絢、相馬香奈子。

上手奥に別のサスペンション・ライトの輪が見えてくると、その中に数人の少女が壊れた人形のように倒れ込んでいる。赤い衣装を身に着けた一人の少女は、アキバ風だが壊れた人形らしい。やがて半壊の赤い少女は白い主人公に執拗な攻撃をかける。ダンスの物語は、白対赤チームの攻防となる。大人への反抗か。少女たちの大人社会への憎悪か。あるいは子供たちの大人たちへの反撃か。

振付は二群構成の技法を使って、両者の攻防を表現した。ダイナミックである。また作曲は優れた構成で隙がない。しかし、ダンサーの動作には音楽をとらえきれないもどかしさも感じられる。音楽と振付、どちらがどちらへ近づくべきだとは言えないが、マッチングは双方の責任であろう。十分な練習時間がとれなかったのかもしれないが。

ラストはマイケル・ジャクソンの「スリラー」めいた内容に変化してしまったが、マイケルの映像があまりに有名なため、赤い少女たちの印象はいま一つということになった。ここから先は振付家の主題に対する理解や意味付与の深さが課題になる。

４．古典と現代を舞いわける「黒髪」「水炎」

高橋通の一弦琴は「黒髪」において、その確かな技術を表現した。地歌三弦の演奏家にひけを取らない。「ゆうべの夢のいま覚めて・・」あたりの展開にも余韻があった。若手の地歌舞舞踊家である花崎さみ八は、品格のある伝統的な技法を守って、よくその責任を果たした。ややもすると、なよなよと骨のない舞いになりがちなこの演目を、しっかり丁寧に舞い納めた。さまざまな振付モティフが散りばめられている神崎流系統の振付を、ひとつひとつ舞い納めていた。とくに「独り寝る夜の・・」息の止め方、「鐘の声・・」の手首の返しなどが印象的である。

課題としては上方舞独特の技法「静と動」の習得であろう。動いているように見えて静止している。止まってポーズしているように見えて「ダイナミックに動いている」という逆説的な表現技法である。また視線については前回よりも上達した表現力がみられた。

高橋澄子の箏による「水炎」は二曲目に演奏された。美しいだけでなくエネルギーが立ち上るような現代邦楽の作りである。力強い演奏だった。作曲の不足している部分を補い、主題をよく表現できたのはその技量の高さによるものであろう。さまざまなヴァリエーションが弾き分けられていて、観客を満足させてくれた。

「舞いわける」という観点からさみ八の舞踊を見ると、少々物足りない。互角のぶつかり合いは望めなかった。当然のことながら、箏のレベルの高さに相当な水を空けられてしまった。他流試合をするためには、今後の精進あるのみ・・・か。

５．邦楽器のための四重奏曲第三番「松の曲」

実力派、粒ぞろいの四重奏団による野田軍行作品の演奏である。今が旬の演奏家だけに、尺八、箏Ⅰ、箏Ⅱ、十七弦とも気合が入っていて、それぞれの技量を競うような形で演奏が進行し、ハラハラ、ドキドキ・・・実に面白かった。この「松の曲」は伝統的な日本画やそれ以前の水墨画に扱われてきた「松」というカテゴリーを包含しつつ、宮中行事や現代的な言説に表れてきた「松」イメージを連想させる優れた作品である。

個人的には十七弦を興味深く聴いた。尺八も主人公にふさわしい力強さである。箏の二人は見目麗しく､厳しさと柔らかさを程よくブレンドした外見でありながら、奏者の腕は確かであり申し分ない。曲は緩急を（速度）遊びながら、コントロールをかけて、次々に驚きをもたらすヴァリエーションで追い駆け、観客を飽きさせない。パフォーマンスの要素を加えて評価しても、現代邦楽団として秀でた存在であり、今後の活躍が望まれる。

６．チェンバロのための小組曲「ミステリー劇場」

サブタイトルを「愛猫たま誘拐事件」、作曲・高橋通となっている。語り手が舞台に現れるとチェンバロが奏で始める。いかにもミステリアスな主題である。描写的な作曲で貫かれている。この曲に誘われて各場面にアイザワサトシという人物が登場。パントマイムだというが、役者という雰囲気の男である。この男が数役を演じ分ける。男役、女役、そして二者のからみの場面も一人で演じた。チェンバロはミステリーの緊張感を出すには良い音色である。奏者も上手い。この描写的な数場面を、ザックリと雰囲気や彩をはっきり変えて提示することに成功した。チェンバロは栗栖麻衣子、語りは壇鼓太郎。序幕のミステリー物語は、不安を抱いて期待している観客を、十分楽しませてくれた。

欲を言えば、マルセル・マルソー全盛期をパリで見てきた筆者としては、もっと思いっきり、過剰に動作する場面が１シークエンスに１動作あってもよいのではないかと思う。演目としてのメリハリがはっきりするし、ほんの２秒間でもインプレッシブになる。マルソーのそういう完成した静止動作（に見えるが動いている動き）が 50 年を経た今でも目の奥に残っているファンの一人としては・・・。

（くにえだ・たかこ　世界舞踊祭２０１３会長）

コンサート・リポート

第５回フランス歌曲研究コンサート
～デュパルクとドビュッシーの歌曲を中心に～

３月 15 日（金）18:30 より中目黒 GT プラザホールにおいて第５回フランス歌曲研究コンサートの公演があった。今回のコンサートについては、ホールの抽選に数回失敗し、公演日が最初の予定より大幅に遅れるという事情があった。しかし、苦労してホールを確保しただけに、その遅れが気の緩みにはつながらず、企画、演奏の両面で内容の熟成をもたらしたようである。

この日のコンサートは、前半が独唱曲、そしてフルートの演奏を挟んで後半がアンサンブル曲という構成で行われた。前半はドビュッシーとデュパルクの歌曲が演奏され、まずドビュッシーの“星の夜”、“マンドリン”、“ピエロ”を齋藤希絵が、“家なき子達のクリスマス”を秋山来実が白取晃司の伴奏で、『フランソワ・ヴ゛ィヨンの３つのバラード』を坂本久美が森田真帆の伴奏で歌った。

続いてデュパルクの“悲しき歌”を岡田真実が、“旅への誘い”を北風紘子が白取晃司の伴奏で、“悲歌”を湯川亜也子が森田真帆の伴奏で、“前世”を増田浩子が白白取晃司の伴奏で歌った。

個々の演奏についての細かい批評は省くが、全体的にみて、まだ一部に学習的な窮屈さが残るものの、声の技術および表現面で少しずつ成長して来ている姿が窺えて嬉しく思った。例えば齋藤希絵など、中音域が薄くなりがちだったが、以前よりふくやかさが増したように感じたし、湯川亜也子の豊かな声量を生かした強弱の陰翳、北風紘子の生真面目な中にも詩情を漂わせた表現など聴き応えがあったし、他の出演者の歌からも、それぞれ成長の跡がうかがえた。

前半の最後は、監修者で出演者たち師匠であるも秋山理恵が森田真帆の伴奏で“戦いのある国へ”を歌い締め括ったが、さすがに弟子達に比べ、芸の力と深さの差を感じさせた。表現を深めて行くためには、一つ一つの言葉と音の意味を理解し、そこから自分の歌を構築して行く必要があろう。師から学ぶことは大切だが、ただ師の後を追うだけではなく、試行錯誤があってもよいから、その作品がもっている世界を自分の力で捉え、自分の歌を構築して行く努力を積み重ねて欲しいと思う。

後半は、まず、原田佳菜子のフルートでドビュッシーの「シランクス」、そして白取晃司の伴奏でフォーレのシシリエンス（シチリアーノ）が演奏された。原田佳菜子は 2008 年のフレッシュコンサートにも出演しているが、フルートの中、低音域の柔らかく豊か音色を生かして詩的な演奏をしてくれた。このように、その日のプログラムを構成した作曲家の声楽曲以外の名曲を挟むのは、とても良い試みだと思う。また、器楽曲が入ることで少し気分も変わるので、お客さんにもよいサービズとなったのではなかろうか。

後半はアンサンブル曲が演奏され、重唱から７重奏まで編成にもバラエティーがあり、また楽しい曲が多く、ハーモニーの美しさが重要な特色ともいえるフランス音楽の魅力を堪能出来た。誌面に限りがあるので演奏した曲目だけでも紹介してお

こう。①ドビュッシー“春よ、こんにちは！”演奏：齋藤、秋山来実、坂本、北風、増田、岡田、湯川　ピアノ：稲葉千恵、森田真帆／②同　“スペインの歌”演奏：齋藤、坂本、稲葉千恵（P）／③ドリーブ “三羽の鳥”演奏：秋山来実、北風、稲葉(P)／④セヴラック“私の可愛いお人形さん”演奏：齋藤、秋山来実、湯川、稲葉(P)／⑤ショーソン“二声のためのロンデル”演奏：増田、湯川、白取(P)/⑥フォーレ“小川”演奏：北風、秋山来実、岡田、稲葉（P）／⑦同　“タランテラ”演奏：北風、岡田、森田(P)／⑧同“この世はどんな魂も”演奏：坂本、増田、岡田、湯川、稲葉（P）／⑨同　“ジャン・ラシーヌ讃歌”演奏：秋山理恵、湯川、大野、新造、森田（P）

後半は秋山理恵がソプラノのパートを歌った混声四部合唱の“ジャン・ラシーヌ讃歌”でプログラムを終えた。アンサンブル曲の最後の４曲はフォーレの作品だったが、やはりフランス声楽曲の分野におけるフォーレの存在はそれだけ大きいということだろうか。

昨年は聴衆が 50 名しか集まらず、集客面で寂しかったが、今年は 89 名の聴衆が来場し、椅子を追加するほどの盛況だった。今回は独唱曲だけでなく、多様な編成のアンサンブル曲が演奏されたこと、フルートのソロが入ったこと、さらに監修者の秋山理恵自身も歌ったことなどが、盛況をもたらした主な要因であろう。アンコールでは武満徹の合唱曲「小さな空」が演奏されたが、あの武満にこんな作品があったのかと意外に感ずるほど、通俗性をもった可愛らしい作品で、演奏者も聴衆も十分楽しんでいた。

今回のコンサートを聴きに来た某会員が「５回のうち何回か聴かせて頂いていますが、皆さん随分上手になったように思います」と感想を述べていた。私も今回が一番充実していたと思う。これからは、一門下だけで固まらず、必要に応じて外部の人達の力も借りて、一層発展させて欲しい。そのような将来性を感じさせる催と思う。

（報告：中島　洋一）

終演後の記念写真　今回の出演者全員（賛助出演の３名はのぞく）

＜歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品＞

日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

読者のみなさんこんにちは。お元気でお過ごしでしたか？
このコーナーは、本誌裏表紙に掲載されていました、本会から出版された楽譜を各月にご紹介して参りましたが、前回からは、本会で新しく制作された楽譜をご紹介しています。

前回は、津田裕子さんのピアノ作品「あめつちのめ」のご紹介をしました。
作曲者の解説によると“「あめつちのめ」とは、天と地を同時に見つめる知恵の光明を宿す瞳のこと。大地に浸潤した水は伏流水となり、やがて水の都を作り、地の底の蠢動（しゅんどう）は造山の後、実り豊かな大地を作る。「あめつちのめは」ただそれを見つめる。”という壮大なテーマによる作品です。ピアノを弾く人にとっては、どういう作品か興味のあるところと思います。是非弾いてみてください。

さて、今回は新制作作品第二弾として高橋雅光作品をご紹介します。

高橋雅光　作品
“独奏フルートによる　哀歌「LAMENTO」”（1982年）
「LAMENTO＝哀歌」という曲想は、嬉しいことは一炊の夢。現実は経済の落ち込みによる生活不安を抱え、災害や別離・戦争・精神の荒廃等、人は生きていくためには、どれだけの悲しみを背負わなければならないのでしょうか。
人が生きていくことは美しくも哀しい。
このような思いを一本のフルートの音に託した作品です。
A4版8頁（CD付き）　　定価（本体2,300円+税）

この作品が作曲された時代は、バブル崩壊前の経済が展開していた時代で、一般の人々の経済状態もややゆとりはありましたが、その将来には内心不安を持っていた時代でもあり、経済の成長とは裏腹に、大人も子供も精神の荒廃が表面化し、特に子供に関する事件が低年齢化してきた時代でもありました。

この頃は、戦時中の戦火の中の苦しい時代を２０歳～２５歳位で生き抜いてきた人々が、まだ５０歳代後半～６０歳代位の年齢で健在であり、戦中～戦後生まれの人と２世代が混在して、戦中・戦後の貧しい生活から脱却した、豊かな生活を目指して日本の経済を展開させていた時代で、それは一瞬の輝きのために、ひとは長い道のりを重荷を背って、歩んで行くようにも感じられます。

＜優れた演奏家との出会い＞

この作品を演奏して頂いたフルーティストの小泉浩氏との出会いは、同じフルーティストの故野口龍氏の紹介によるものでした。

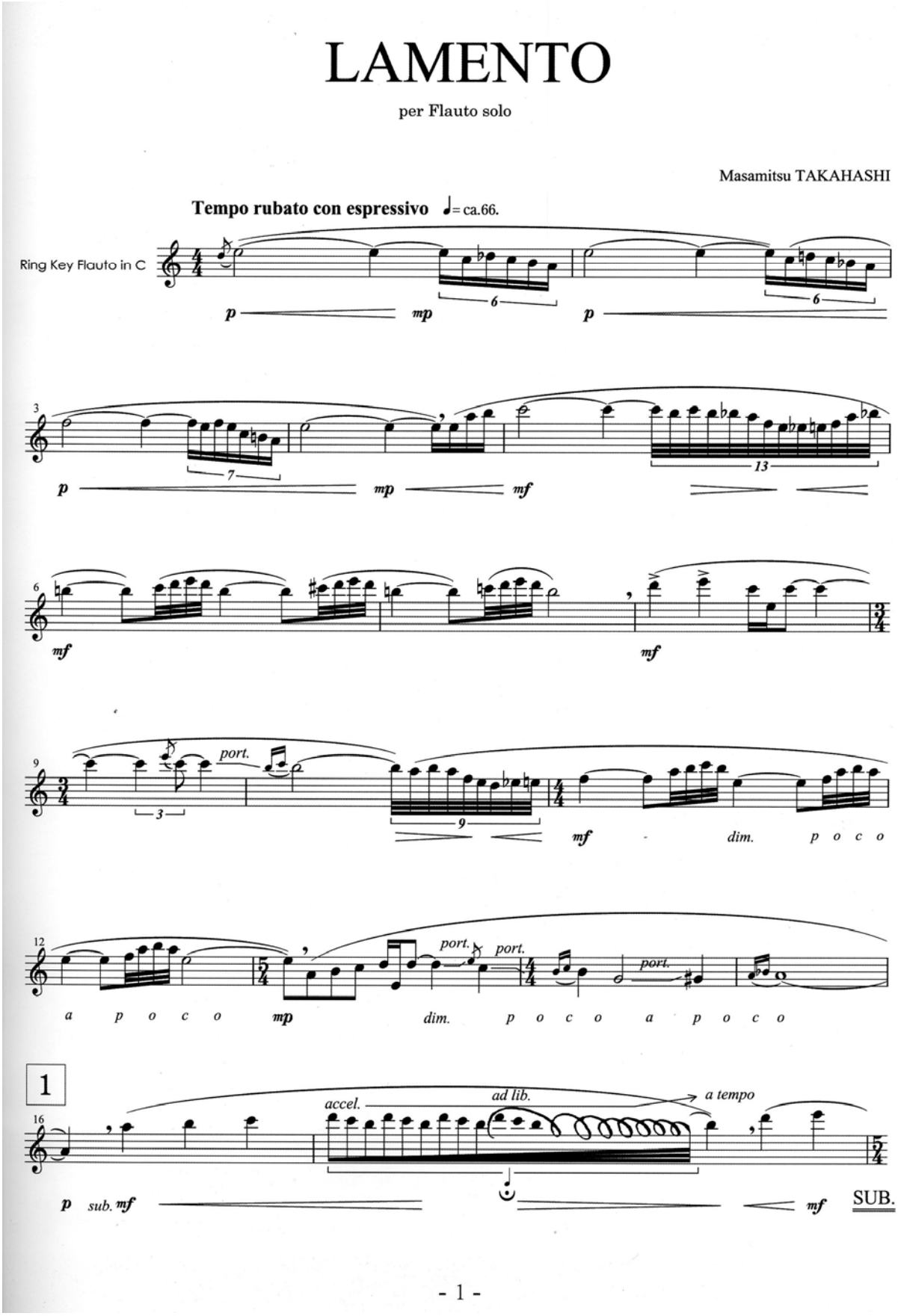
小泉氏の優れた才能に感動させられたのは、２回目のコンサートのための練習のときでした。前回の演奏の経験を踏まえて、作品の冒頭部分を、ふくよかな音や透明感のある音等、何通りか音質を変えて吹きながら、作品の持つイメージ作り・音作りをしていましたが、決定した音作りが作品のイメージとピッタリであったこと。特に曲の冒頭の出だしと終結部等の印象を大切にとの指示をしたところ、音質を変えて表現して頂いたこと。演奏会当日は小泉氏が「この作品の演奏で、曲の最後まで止まらずに演奏できる見込みは３０％であることを了承してもらいたい」このことでしたが、アレグロの最後のところで瞬間止まりそうなところはありましたが、よく吹き切れていました。テンポの緩急の取り方、音質の変化の具合等や演奏の仕上がりも奇麗にできていて、すばらしい才能だと感心し、よい演奏家に出会えた嬉しさが印象に残っています。

＜作品の裏話＞

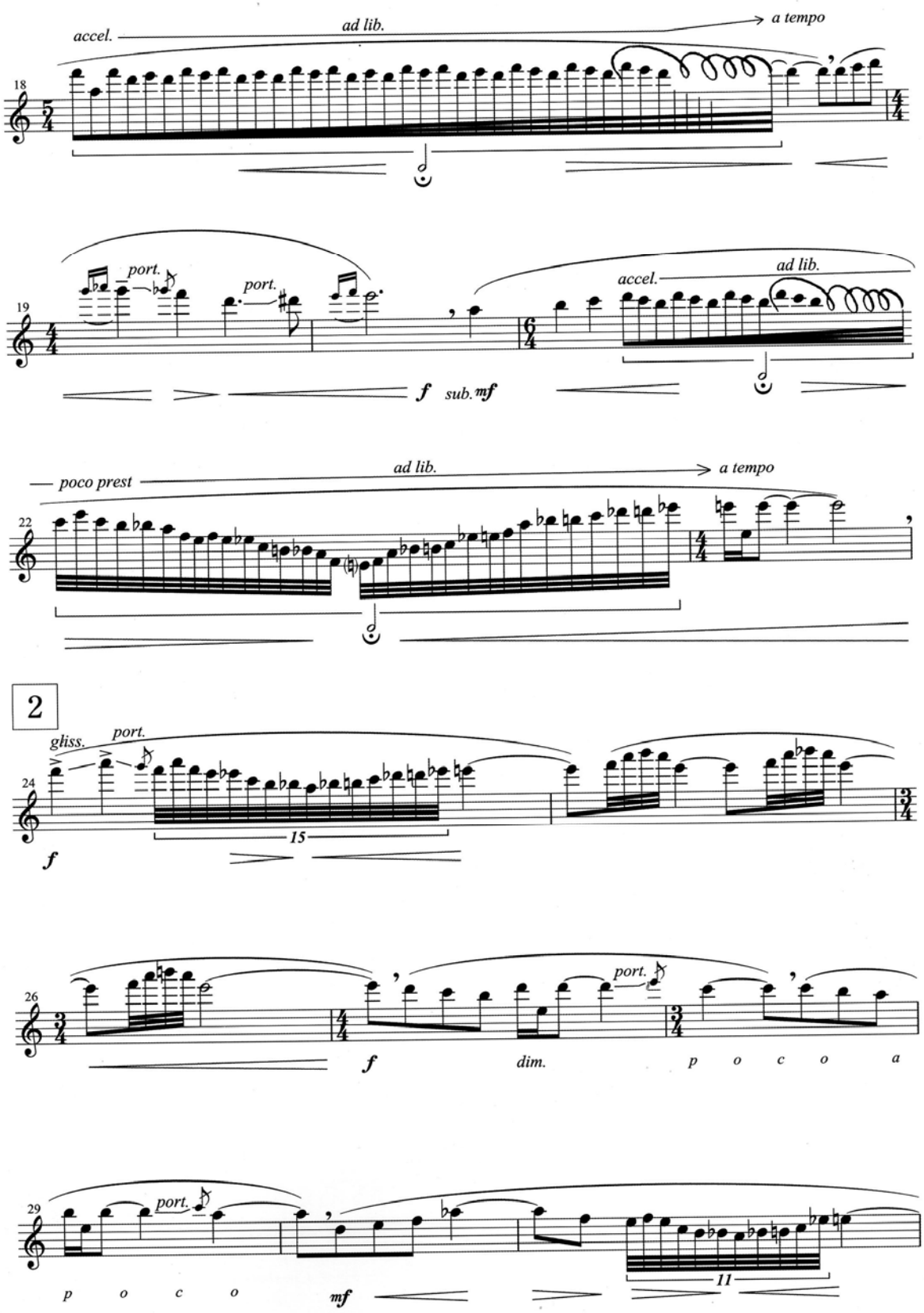
西洋音楽の楽曲の構成仕方は、動機を構築・造形していくように展開していきますが、この作品は、主題・動機を拡大・縮小・順行・反行等をしながら少しづつ形を変えながら展開をしていくように作られています。このやり方は、直後に作曲をした“ピアノのための「カプリチオ」”にも応用され、日本の伝統的な音の使い方である、音をすり上げたり、すり下げたりする効果と共に、私の芸風の一つになっています。

この作品が出来上がった当初は、曲の最後を重音で終わるように書きましたが、小泉氏が「この作品の性質からいって、最後の音は透明感のある音で印象的に終わった方がよい」との意見でした。私は「私も最後の音は印象的に終わった方がよいと思い重音で書いた」と言ったところ、「この曲の性質・流れからいって一発で奇麗に重音が出ればよいが、できなければこの曲が台無しになる。」と小泉氏が反論。私は「最後の音はこの作品の点睛に当たる」と固執していると、小泉氏は「この曲は中間部のアレグロの所が大変難しい、私でもそう思うのであるから、他の人も推して知るべしである。そして最後まで緊張して演奏するのであれば、誰も演奏したがらないのではないか」さらに「この作品は最後まで奇麗に終わった方がよい。」と話されたので、私は「では、最後の音を半音の装飾音をつけて通して吹いて下さい。」と言い、重音で吹いた場合と２通りで演奏して頂き、考えを重ねた結果泣く泣く“最後の音は半音の装飾音をつけた音”で決着。今思い返せばそれでよかったと思いました。ここでも優れた演奏家との出会いに感謝です。

本会出版局楽譜出版部　高橋雅光



高橋雅光作曲：“独奏フルートによる　哀歌「ＬＡＭＥＮＴＯ」”P1



高橋雅光作曲：“独奏フルートによる　哀歌「ＬＡＭＥＮＴＯ」”P2

時評

古い村の崩壊と新しい村の建設

昔、作家で大学教授、評論家だった故伊藤整が、日本と西洋の文学者を「逃亡奴隷と仮面紳士」という比喩で定義したことがある。日本の文士は世間からは、はみ出し者、異端者とみられ、そこには自分の居場所がなく、そこから逃げ出し、文壇という居場所に集まる。西洋の文士は、仮面を被りながら社会人として生き続ける、というのである。伊藤整自身は、如何にも大学の先生、知識人という風貌と雰囲気を持った人で、むしろ仮面紳士に属したのであろう。こんな話で切り出したのはそれを話のきっかけにするためであり、文学の話をするのが本題ではない。しかし、文士が世間のしきたりを守らない、それに従わない変人、はみ出し者とみなされたという事実は確かにあったと思われる。詩人の萩原朔太郎が、故郷の群馬県の街を歩いていると、子供達に「気狂いが通る」と言われ、石を投げられたという逸話が残っている。実は私が音楽の道に入った動機も、もちろん、音楽が好きだったこともあるが、田舎に住んでいると話の合う人間も理解者も少なく、そのくせ色々干渉して来るので、田舎から出たいという願望が強かったことも動機の一つであった。

日本人は地方、都会と言わず、どこに住んでいても、群れをつくりその中で共生して行く傾向が強かったのではなかろうか。つまり「村」をつくるのである。「村」の住民はお互いに助け合い協力しあう反面、他の村の住人、つまり他者に対して排他的である。頑なな自分達の規律、価値観をもち、それと違うものを拒否するのである。女を追っかけ廻し、通常の仕事はせず、夜を飲み明かし、徹夜でものを書き、昼は寐て過ごすような物書き風情は、目障りで好ましくない異端者と写ったことであろう。では、逃亡奴隷たる文士はどこへ行ったのか。世間という村から脱して、文壇に逃げ込んだのだが、文壇もまた彼等にとっての「村」だった筈である。

しかし、こういう話はもう昔話になってしまったのではなかろうか。今は物書きだけが集まる文壇村のようなものも存在しないだろうし、世間という村社会も存在が希薄になって来ている。孤独死、いじめなどの問題も昔はそう多くなかったと思われる。なぜならば、隣近所の誰それが病気だということになれば、誰かが気がつき、村の人々に連絡したであろうし、ガキ大将が弱い子をいじめる程度なら大目に見たとしても、金銭を要求したり、身体に危害を加えるなど、度が過ぎたいじめに対しては、周りの大人達がそれを許さず、注意して止めたであろう。

村は世間だけではない。会社などの職場も一種の村であろう。しかし、昔に比べればいまは、職場内の人々の結びつきも希薄になって来ているのではなかろうか。

村の存在が希薄になったということは、煩い干渉もなくなったかわりに、何かが起こった時に誰かが手をさしのべてくれることもなくなったということである。このような環境変化の中で人は自分と社会との関係をどのように構築し、保とうとするのであろうか。特に若者たちは。

数年前に秋葉原で無差別殺人事件があったが、加害者のＫは今の多くの若者たちと同様、身の回りに友達は少なかったものの、ネットへの書込みはかなり熱心にやっており、ネット上での知り合いは多かったようである。彼はその日の行動を逐一

ネット上に流している。彼は心の底では誰かが自分の書込を読み驚き、止めてくれることを願っていたのではなかろうか。しかし、誰も止めることはなく、計画は実行されてしまった。この場合ネットは、昔の村の機能を果たしてくれなかったのである。

もともと「村」は共生して行く為に不可欠なものであった。貧しく、権力ももたない人々は、お互いに助け合って行かなければ生きて行くのが難しかったであろう。地方でなくとも江戸の長屋の住人なども、同じような感覚で生きていたのではなかろうか。しかし経済的に豊かになり、価値観も多様化すると、それとともに村の結びつきも希薄になって行った。家族形態も変わり、一軒の家に大家族が住むようなことも少なくなり、核家族化し、子供に子供部屋まで与えるようになり、家族の結びつきもだんだん希薄になって行く。

人々の結びつきが希薄になり、それが新たな問題になっている昨今、生活のあり方を、人との結びつきという観点から見直そうという動きが出て来ている。例えば居住環境の面でいうと、「シェアハウス」が急速に数を増やしているようだ。シェアハウスとは、個人スペースと共用スペースの両方を持ち、寂しくなったときには他の住民と共有スペースで団らんし、食事を共にすることも出来る。一人になりたい時には、個室で過ごすことも出来るというものである。昔の村のように干渉されプライバシーが守れないということもないし、マンションや一戸建て住宅のように、人との関係が絶たれることもない。

これは、ほんの一例だが、これからは、個の独立と他者との連帯という人が生きて行く限り必要なことを両立させうる、新しい村のあり方を模索し、創いて行くことを必要とする時代に来ていると思う。それは、我が国だけの問題ではない。根本的には世界的な問題と思う。古い村は、自分の意志とは関係なく生まれた時、取り込まれた村で、同じ価値観を強要されることが多かった。新しい村は自分の意志で選択することが出来る村となろう。ひ弱といわれる最近の若者達だが、好ましい傾向の芽生えも窺える。それは、ボランティア活動などを積極的に行い、そこで出逢った人々と新しい人間の絆を築きその輪を広げて行くという生き方だ。自分の意志で、新しい村（人との絆）を創出して行こうというのだ。

ところで、音楽にも人と人との絆を築いて行く力はありそうだ。しかし、音楽畑の人、特にクラシック関係の音楽家は、師弟関係、同業者といった小さな村に閉じこもりがちである。むしろこれからは、新たな絆を求めて、新しい村を創出し、多様な人々を取り込み、その輪を広げて行く強い意志と活力が要求されるのではなかろうか。

歌舞伎界の話だが、故十八代中村勘三郎はニューヨークで歌舞伎公演を行い異国でも歌舞伎の愛好者を増やそうと懸命な努力を重ねた。故十二代市川團十郎もパリオペラ座で公演する際、フランス語をまったく理解できない身でありながら、長い口上をフランス語で語るなど、フランスにおける歌舞伎の理解と普及のため、大奮闘している。いまは、音楽人にもこのような情熱と努力が必要と思われる。

話が飛躍してしまったが、人は一人では生きられない。ならば、良い人間関係を創いて行く勇気と知恵が大切であろう。新しい村を建設する努力が一般社会においても芸術に携わる者にも必要なのではなかろうか。　（日野啓太郎）

"Fresh Concert"- CMDJ 2013 -

～より豊かな音楽の未来をめざして～

２０１３年４月５日（金）　18:30 開演
すみだトリフォニーホール　小ホール
主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

Fresh Concert は　昨年４月 13 日に第 10 回目を終え、今年は第 20 回を目指し、気分を新たにして、新しいスタートを切りたいと思います。一昨年の３月 11 日には東日本大震災、福島原発事故という未曾有の大災害、大事故に襲われ、２年経過した現在でも、鉄道網でさえまだ完全には復旧しておらず、復興への道はいまだ険しいようです。被災者および関係者の方々には計り難いご苦労がおありでしょうが、頑張っていただきたいと思います。

幸いにして、最近になって我が国の経済はやや上昇の兆しがみえてまいりましたが、それでも、文化関係の助成金などは減らされる傾向にあり、音楽界の状況は依然厳しいものがあります。このような状況はこの十数年ずっと続いておりますが、そのような時代であるからこそ、若い才能を発掘、育成することも、長い歴史を重ねて来た音楽文化団体として果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、2003 年度から毎年３月下旬～４月上旬に『Fresh concert』を企画してまいりました。

昨年 10 回目の区切りを通過し、11 回目を迎える今回は、木管楽器、金管楽器のアンサンブルがあり、１７人の若い音楽家達を世に送り出します。伴奏者を含めると２２人の方々が、このコンサートを目指して研鑽に励んでまいりました。

どうか、若い音楽家たちの奏でる音楽に耳を傾け、暖かい拍手を送って励ましてください。また、その音楽が、聴きに来て下さった皆様方に、少しでも音楽の喜びと生きる活力を与えうるものとなったら、出演者およびスタッフにとって、この上ない喜びであります。

日本音楽舞踊会議　　代表理事　　助川敏弥、深沢亮子
理事長　　北川暁子
公演局長　　北條直彦
コンサート実行委員長　中島洋一（文責）

《プ ロ グ ラ ム》

内田しおり（S-Sax.）／中村有里(A-Sax.)／小田采奈(T-Sax.)／丹沢誠二(Bar.Sax.)

マスランカ　「レシテーション・ブック」より 1,5 楽章　〈サクソフォーン四重奏〉

保坂 瑞枝(ソプラノ)　ピアノ：森田 真帆

フォーレ　“月の光”　Op.46-2／マンドリン　Op.58／ひそやかに

吉田 連（テノール）　ピアノ：伊藤 眞祐子

ガスタルドン　“禁じられた音楽”

ドニゼッティ　歌劇『愛の妙薬』より　“なんとかわいい人だ”

小林萌里（ピアノ）

リスト　メフィストワルツ 「村の居酒屋での踊り」 S.514

種谷 典子(ソプラノ)　ピアノ：松田　怜

リスト　「ペトラルカの３つのソネット」より　“平和は見つからず”

---------- 休憩 ----------

石橋由衣(Tp.Ⅰ)/森田小百合(Tp.Ⅱ) /萩野谷美咲(Hn.)/梅澤駿佑（Trb.）/若松将正(Tuba)

ターナー　「リコシェ」　〈金管五重奏〉

尾形 志織（ソプラノ）　ピアノ：高田 絢子

ドニゼッティ　歌劇『ランメルモールのルチア』より　狂乱の場

宮崎 芳弥（ピアノ）

ショパン　バラード第３番　変イ長調　作品４７

藤原 唯（ソプラノ）　ピアノ：牧野 優子

ドニゼッティ　歌劇『アンナ・ボレーナ』より

“あなたがた泣いているの？～私の生まれたあのお城”

芦田 瑞樹（テノール）　ピアノ：伊藤 眞祐子

山田耕筰　〈城ヶ島の雨〉

チレア　歌劇『アルルの女』より　〈フェデリーコの嘆き〉

司会：西山 淑子

【出 演 者 略 歴】

Spiral Saxophone Quartet

2010 年作曲家による新曲初演のため結成。学内外問わず、さまざまな演奏会に出演。2012 年下地啓二氏による、室内楽コース履修。学内オーディション通過者による第 90 回ソロ、室内楽演奏会出演。好評を博す。

左より、丹沢、中村、内田、小田のメンバー

内田 しおり（うちだ・しおり：ソプラノ・サクソフォン）

徳島県出身。国立音楽大学卒業。室内楽コース修了。サックスを雲井雅人、荒木浩一、糀寿麗各氏に、室内楽を雲井雅人、下地啓二、滝上典彦各氏に師事。F.ヘムケ氏のマスタークラスを受講。２０１１年自身初のソロリサイタルを開き好評を博す。学内オーディション通過者によるソロ室内楽演奏会に三度出場。第１回サンハートアンサンブルオーディション最優秀賞受賞。Green Ray Saxophone Quartet 所属。現在、フリーランス奏者としてホテルやモール、医療施設での演奏活動やダンスとの共演、自主製作によるコンサートなど、ジャンルを問わず活動中。

中村 有里（なかむら・ゆり：アルト・サクソフォン）

東京都出身。国立音楽大学附属中学・高等学校を経て、国立音楽大学卒業。弦管打楽器ソリストコース修了。現在、国立音楽大学大学院修士課程 1 年。第 11 回大阪国際音楽コンクール、第 17 回 KOBE 国際音楽コンクール入賞。学内選抜者による、2011 年ゾリステンコンサートにて本学オーケストラと共演、第 90 回ソロ・室内楽定期演奏会にてソロと室内楽共に出演。これまでに滝上典彦、下地啓二、雲井雅人各氏に師事。

小田 采奈（おだ・さいな：テナー・サクソフォン）

岡山県出身。国立音楽大学卒業。演奏応用コース修了。サクソフォーンを雲井雅人氏、室内楽を雲井雅人、滝上典彦、下地啓二各氏に師事。ジャズを池田篤氏、アンサンブルを池田篤、山下洋輔、金子健各氏に師事。

丹沢 誠二（バリトン・サクソフォン）

東京都出身。国立音楽大学演奏学科弦管打楽器専修を卒業。現在、同大学のアドヴァンストコースに在籍。これまでにサクソフォーンと室内楽を滝上典彦、雲井雅人、下地啓二の各氏に師事。ジャズを山下洋輔、渡辺貞夫、池田篤史、本田雅人、金子健の各氏に師事。国立音楽大学 NEWTIDEJAZZORCHESTRA に所属し、山野ビッグバンドジャズコンテストにおいて最優秀賞を三回受賞。また、小曽根真氏、渡辺貞夫氏など多くの著名なアーティストと共演。サイトウキネンフェスティバル松本には二年連続で出演し、本田雅人氏と共演を果たす。その他にもホテル、レストランでの演奏、ライヴ活動などを中心にクラシックからジャズまで精力的に活動をしている。

保坂瑞枝（ほさか・みずえ：ソプラノ）

沼田女子高等学校卒業。国立音楽大学声楽科卒業。
群馬新人演奏会出場。洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修了。
在学中、同大学院リサイタルシリーズに出場。
声楽を秋山理恵氏に師事。

森田 真帆（もりた・まほ：伴奏 ピアノ）

桐朋学園大学演奏学科ピアノ専攻卒業。卒業演奏会に出演。国立音楽大学大学院器楽専攻伴奏科修了。アジアクラシックコンクール優秀賞。ディヒラー・サトウコンクール第２位、飯塚新人音楽コンクール第3位入賞。ピアノを玉置善己、山崎牧子、近藤伸子の各氏に師事。現在国立音楽大学大学院歌曲科伴奏員。歌曲の伴奏者として、数多くの日本音楽舞踊会議主催コンサートに出演している。

吉田連（よしだ・れん：テノール）

東京都出身。東京都立国際高校卒業。国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専修卒業・声楽コース修了。第81回読売新人演奏会に出演。声楽を飯野英恵、角田和弘、久岡昇、岩森美里の各氏に師事。これまで『フィガロの結婚』バジリオ、クルツィオ、『コシ・ファン・トゥッテ』フェルランド、『ドン・ジョヴァンニ』ドン・オッターヴィオ、『こうもり』アイゼンシュタイン、アルフレード、『椿姫』ガストーネ伯爵などソリスト・合唱として多くのコンサートに出演し研鑽を積む。現在、同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻（オペラコース）2年在学中。ア・カペラユニット「Cinque minuti」メンバー。オペラ団体「Paradiso」代表。

伊藤眞祐子（いとう・まゆこ：伴奏ピアノ）

国立音楽大学附属高等学校、国立音楽大学を経て、現在国立音楽大学大学院器楽専攻（伴奏コース）に在学中。ピアノを小畠康史、堀江孝子、今井顕、伴奏法を河原忠之の各氏に師事。学内で催されたヴィルヘルム・ブロンズ氏、練木繁夫氏の特別レッスンに参加する。2009年、ポルトガルのオビドスにて行われた夏期国際マスタークラスにてパウル・バドゥーラ＝スコダ氏の薫陶を受けた。

小林萌里（こばやし・もえり：ピアノ）

茨城県笠間市出身。2003年コンクールミリオン優秀賞、第57回全日本学生音楽コンクール東京大会ピアノ部門入選。第20回ヤングアーチストピアノコンクールG部門銀賞(最高位)。2012年東京音楽大学卒業。学内演奏会、ピアノ卒業演奏会等出演。2012年元ピアソラ五重奏団のピアニスト、パブロ・シーグレル氏のマスタークラスを五重奏で受講。同年、池袋、雑司ヶ谷を中心に八重奏団によるピアソラ作品等、アルゼンチン音楽の演奏活動を開始する。これまでにピアノを林玲子、上仲典子、深澤亮子、武田真理、鈴木弘尚の各氏に師事。

現在ソロ、室内楽等で活動中。

種谷 典子（たねたに・のりこ：ソプラノ）

広島県出身。国立音楽大学卒業、卒業時に武岡賞受賞。平成25年3月、同大学大学院修士課程声楽専攻オペラコース修了、修了時に声楽部門最優秀賞受賞。大学院新人演奏会に出演。宮内庁主催桃華楽堂御前演奏会に出演。第81回読売新人演奏会出演。ヤマハ主催音楽大学フェスティバルコンサート2011に出演。広島プロミシングコンサート2011にて、広島交響楽団と共演。これまでに菅野宏昭、下原千恵子の各氏に師事。平成25年4月より、新国立劇場オペラ研修所に在籍。

松田　怜（まつだ・ れい：伴奏ピアノ）

国立音楽大学附属高等学校作曲科を経て、同大学音楽学部演奏学科鍵盤楽器（ピアノ）専修卒業、同時に鍵盤楽器ソリスト・コースを修了。在学中、ダン・タイ・ソン、M・ベロフ、N・トゥルーリ、A・バックス各氏の特別レッスンを受講した他、第88回ソロ・室内楽コンサート、卒業演奏会に出演。第52回ニース夏季国際音楽アカデミーに参加。卒業時には石間奨学金を給付される。現在、同大学大学院修士課程器楽専攻（ピアノ）に在籍。これまでに、ピアノを菊池大成、奈良井巳城、小佐野圭、安井耕一の各氏に、作曲を山本康雄氏、指揮を大澤健一氏に師事

アイネ・クライネ・ブラスアンサンブル

ブラス・スプリッツァー、北日本金管五重奏団、Tuba Summit、MOVE UP TUBAに所属。
2012年7月、国立音楽大学Aオーケストラ定期演奏会で、マーラーの交響曲第2番「復活」で合唱のバスとして出演し、準・メルクルと共演。
2012年11月、国立音楽大学第90回ソロ・室内楽定期演奏会に金管五重奏で出演。
金管五重奏、ユーフォニアム、チューバなどのアンサンブル、金管バンドにおいて編曲も行っている。

左より梅澤、石橋、森田、若松のメンバー

石橋 由衣（いしばし・ゆい：第１トランペット）

東京都出身。国立音楽大学附属高等学校を卒業。現在、国立音楽大学でトランペットを専攻。同高等学校卒業演奏会に出演。2008年度日本トランペット協会主催トランペットフェスティバルソロ部門に出演。2013年度津堅直弘コンクール、アンサンブル部門第2位。ピーターマセウス、ピエール・デュトのマスタークラスを受講。これまでに井川明彦、古田賢司、山本英助の各氏に師事。

森田小百合（もりた・さゆり：第２トランペット）
東京都出身。国立音楽大学附属高等学校卒業。現在、国立音楽大学でトランペットを専攻。トランペットを山本英助氏に師事。第 12 回日本ジュニア管打楽器コンクールトランペット部門高校生コースにて金賞を受賞。2012 年 11 月、国立音楽大学第 90 回ソロ・室内楽定期演奏会に金管五重奏で出演。

萩野谷美咲（はぎのや・みさき：ホルン）
茨城県出身。茨城県立水戸第三高等学校音楽科卒業。現在、国立音楽大学でホルンを専攻。12 歳よりホルンを始める。ホルンを古谷幸子、井手詩朗、大野良雄、日高剛の各氏に師事。第 13 回日本ジュニア全管打楽器コンクール第一位。

梅澤 駿佑（うめざわ・しゅんすけ：トロンボーン）
宮城県出身。宮城県石巻好文館高校卒業。現在、国立音楽大学トロンボーン専攻、ソリストコースに在学中。これまでに箱山芳樹、小田桐寛之、菊池公佑の各氏に師事。
ファブリス,ミリシェー、ミヒャエル,マソンの各氏のマスタークラス受講。
第 15 回日本トロンボーンコンペティション奨励賞。第 5、6 回仙台トロンボーンコンペティション最優秀賞。第 8 回ルーマニア国際音楽コンクール管楽器部門 3 位。
第 4 回トロンボーンクァルテットコンクール・イン・ジパング 3 位。
2012 年 11 月、国立音楽大学第 90 回ソロ・室内楽定期演奏会に金管五重奏で出演。

若松 将正（わかまつ・ゆきよし：テューバ）
秋田県出身。秋田県立秋田南高等学校卒業。現在、国立音楽大学でチューバを専攻。
12 才よりチューバを始め、これまでにチューバを池田幸広、柳生和大の各氏に師事。
室内楽を三浦徹、山本英助、井出詩朗の各氏に師事。声楽を矢田部一弘氏に師事。

尾形 志織（おがた・しおり：ソプラノ）

国立音楽大学大学院声楽専攻オペラ科卒業。大学在学中、オペラ・ソリストコースに在籍。
これまでに声楽を牧野正人、高橋薫子、佐藤ひさらの各氏に師事。2005 年『第 6 回高校生のための歌曲コンクール』入選、奨励賞受賞。及びイタリア短期留学へ参加し、L・ランティエーリ女史の指導を受ける。国立音楽大学学内選抜演奏会『ゾリステンコンサート』(2008)、『ソロ・室内楽コンサート・春』（2009）、『VOCAL CONCERT』（2009）、『卒業演奏会』（2010）に出演。2011 年 1 月『ＪＴアフタヌーンコンサート』へ出演。2012 年 4 月 Paradiso 公演『こうもり』ロザリンデ役、2012 年 7 月イタリア・アレッツォ音楽祭にて歌劇『フィガロの結婚』公演に伯爵夫人役で出演。また、2013 年 3 月にも渋谷さくらホールにて同じく歌劇『フィガロの結婚』伯爵夫人役で出演。

高田絢子（たかだ・あやこ:伴奏ピアノ）

国立音楽大学鍵盤楽器専修修了。同大学院器楽科伴奏(歌曲)コース修了。ピアノを奥村京子、小林光裕、芝治子、安井耕一の各氏に師事。伴奏法を河原忠之氏に師事。新国立劇場オペラ研修所ピアニスト及びコレペティトゥール特別聴講生。

宮崎芳弥（みやざき・よしみ：ピアノ）

略歴　山口県出身。2004 年東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業、2006 年同大学院鍵盤楽器研究領域修了。在学中に日本演奏家コンクール第１位他、各種コンクールに入賞。
旧東京音楽学校奏楽堂、カザルスホール、オペラシティリサイタルホールで招待演奏会に出演。第 9 回浜松国際ピアノアカデミー受講。2006 年故郷の中学校でトーク＆リサイタル
2008 年　春のピアノ研修・パリに参加。2010 年　ＰＴＮＡ新人指導者賞を受賞。これまでにピアノを藤井浩子、石井克典、岡田敦子、長島圭太の各氏、チェンバロを渡邉順生氏に師事

藤原 唯（ふじわら・ゆい：ソプラノ）

群馬県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。４年次にオペラ・ソリスト・コースに在籍。また、国立音楽大学国内外研修奨学金を得てイタリアでの声楽講習会に参加。平成２５年、同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻（オペラ・コース）修了。在学中、２０１１年大学院オペラ《フィガロの結婚》花娘、大野和士氏によるレクチャーコンサート《ドン・ジョヴァンニ》及び２０１２年大学院オペラ公演《ドン・ジョヴァンニ》にドンナ・アンナ役で出演。大倉由紀枝氏に師事。

牧野 優子（まきの・ゆうこ:伴奏ピアノ）

国立音楽大学音楽学部演奏学科鍵盤楽器卒業。上級アドヴァンスト・アンサンブルピアノコース修了。現在、大学院伴奏科に在籍。ピアノを野牧幹代氏、小林光裕氏、金子恵氏に師事。アンサンブルピアノを菊地真美氏、星野明子氏、河原忠之氏、安井耕一氏に師事。

芦田　瑞樹（あしだ・みずき：テノール　）

昭和 63 年生。千葉県出身。平成 23 年、玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科卒業。平成 25 年、国立音楽大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻イタリア歌曲コース修了。島村武男、イングリット・ハウボルト、市川和彦、市川倫子、福井敬、イタリア歌曲を下原千恵子、ドイツ歌曲を田中淑恵（敬称略）の各氏に師事。国立音楽大学大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」ドン・オッターヴィオ、玉川大学「大学音楽祭」第九ソリスト。

【曲 目 解 説】　　中島　洋一

マスランカ　　「レシテーション・ブック」より第 1、第 5 楽章
D.Maslanka　　「Recitation book」～　1st-mov , 5th-mov.

デイヴィッド・マスランカ(1943～) はマサチューセッツ州ニューベッドフォード生まれのアメリカの作曲家で、管弦楽、声楽、室内楽、吹奏楽など様々なジャンルの作品がある。「レシテーション・ブック」とは、キリスト教の典礼に使われる読誦（どくじゅ）集のことである。この作品は、2006 年に作曲され、2007 年に雲井雅人サクソフォーン四重奏団により初演されている。全 5 楽章を演奏すると 25 分程度かかるが、今回は時間の都合で、第１，第 5 楽章のみを演奏する。

第 1 楽章〈打ち砕かれた心〉：コラール旋律「三つにして一なる汝」による瞑想曲
アルトのソロでＡ（イ音）から始まるコラールの旋律が奏され、それが他の声部に受け継がれ、お互いに声を掛け合うように多声部的に広がって行き、快活な音楽となる。再び、最初のコラールの旋律に戻り、静寂のうちに終わる。
第 5 楽章〈ファンファーレ／変奏〉：「アダムの罪によりて」による
変ニ長調のファンファーレ風の旋律ではじまるが、速度の速い華やかな楽想に移り、やがてコラール風の静かな楽想が現れる。再び華やかで活力のある音楽に戻り、現世を謳歌するかのように、G（ト）の音で曲を閉じる。アダムの罪を嘆き悔いるのではなく、アダムとイブによって作り出された男と女の世界を讃えるかのような、明るく生命感に満ちた音楽となっている。

フォーレ　　“月の光”　Op.46-2／“マンドリン”、“ひそやかに”　Op.58
G.Fauré　　“Clair de lune”　/　“Mandoline”　/　“En sourdine”

ガブリエル・フォーレ（1845-1924）は、フランス歌曲の世界で最も重要な作曲家であるが、今回演奏される 3 曲は作曲家として油が乗って来た 40 代の作品で、すべてヴェルレーヌの詩に作曲されている。これらの作品は旋律も美しく、後期の作品にみられる晦渋さもまだ姿を見せないため、歌い手にも聴衆にも好まれ、コンサートで演奏される頻度が高い。なお、“マンドリン”と、“ひそやかに”は、５曲からなるヴェルレーヌの詩による連作歌曲『ヴェネチアの５つの歌』の第１曲と第２曲にあたる。従って作品番号は同じである。

“月の光”は、フォーレが初めてヴェルレーヌの詩を手がけた歌曲作品であり、数あるフォーレの歌曲の中でも傑作中の傑作といえよう。楽曲構造は小ロンド形式を思わせる A-B-A-C-A になっており、まず、ピアノだけで A の主題が長々と奏され、やがて歌が唱和して行く。このピアノと歌のやりとりは非常に魅力的である。C の部分では、曲調が変わりリディア旋法が現れるが、最後に歌のパートが A の主題を高らかに歌い、それをピアノが引き継いで静かに曲を閉じる。

“マンドリン”　ギター風の軽やかな伴奏に乗って、セレナード風に歌われる。詩は４節からなり、第２節の終止で属調に到達するという伝統的な形式を採るが、長三度上の調（第１節）、短三度上の調（第３節）など、巧みな遠隔調の転調が音楽に変化と彩りを与えている。

“ひそやかに”　詩は５節からなるが、３，４節が中間部を形成し、５節で最初の旋律に戻る。ピアノの 16 分音符の穏やかな分散和音で始まり、伴奏部の輪郭をなぞりながら穏やかに旋律が歌われる。中間部は表情が変わり、モードも同主音上のドリア律になり、ドリアのⅣ7 の和音（属七と同じ構成音を持つ）が出現するが、ここは実に美しい。この作品は中期のフォーレの作風の特徴がよく現れた佳品といえよう。

ガスタルドン　“禁じられた音楽”

S.Gastaldon　　Musica proibita

スタニスラオ・ガスタルドン（1861～1939）は歌曲を多く作曲しているが、器楽曲、合唱曲、そしてオペラも４作残している。しかし、現在ではそれらの作品は殆ど演奏されることはなく、“禁じられた音楽”のみが、いまでも多くの人々に親しまれ、テノール歌手が好んで演奏する。

イ長調 4/4：　８小節のピアノの前奏のあと「夜ごと私のバルコニーの下で愛の歌を聴く」と歌い始めるが、次第に感情が昂ぶり、嬰ハ長調→ヘ長調と３度転調を重ねる。後半の「口づけしたいあなたの黒髪、あなたの唇」と歌う部分からニ長調に変わり、終盤で旋律はテノールの最高音域を行き来し、ドラマチックに盛り上がって、曲を閉じる。

ドニゼッティ　歌劇『愛の妙薬』より " なんとかわいい人だ "

G.Donizetti　　《L'elisir d'amore》～　" Quanto e' bella "

ガエターノ・ドニゼッティは(1797-1848)は、多くのオペラ作品を残している。『愛の妙薬』は、喜歌劇的な性格の作品だが、同時代の作曲家、ロッシーニの「オペラ・ブッファ」が、軽快で底抜けに明るいのに対して、美しくロマンチックな旋律が多い牧歌劇となっている。

" なんとかわいい人だ " は第１幕第１場で純情な若者ネモリーノが歌うカヴァティーナ（より素朴なアリア）　ハ長調 2/4：ネモリーノは若い美貌の農場主アディーナを眺めながら「なんとかわいい人だ」と讃えるが、自分に愛を訴える力がないことを嘆く。16 分音符の分散和音にのった素朴で美しい旋律は、ネモリーノの純情な性格を表し、これから後の愛の行方に期待を抱かせる。なお、ネモリーノのアリアでは、第２幕第２場で歌われる『人知れぬ涙（ロマンツァ）』が最も良く知られているが、“なんとかわいい人だ”もそれに劣らぬ美しい曲である。

リスト　　メフィストワルツ　「村の居酒屋での踊り」 S.514

F. Liszt　　Mephisto-Walzer　[Der Tanz in der Dorfschenke]

フランツ・リスト（1811-1886）は、ファウストの伝説に強い関心を抱いていたが、同郷の詩人ニコラウス・レーナウインの長編詩からインスピレーションを得て作曲したのが**「村の居酒屋での踊り」である。**メフィストワルツは未完の第４番を含めて４曲あるが、第１番とされているこの曲が最も有名で、演奏される頻度も高い。この曲は他に管弦楽版、４手ピアノ版がある。

曲はスケルツォのような速いテンポで始まり、ホ、ロ、ヘ＃、ハ＃と完全五度が堆積されて行き、右手にヴァイオリンの調律を描写する、ニ、イ、ホの音型が現れる。このあたりの和音処理は当時としてはかなり革新的である。調弦が終わると、メフィストフェレスが奏でるヴァイオリンの旋律がイ長調 3/8 で現れる。音楽が盛り上がったところで、村娘が現れ、変ニ長調に変わりテンポが少し遅くなり、魅惑的なワルツとなる。ここは村娘の魅力にうっとりしたファウストが村娘の手をとって踊るところである。変ロ長調に変わり、またメフィストイトフェレスのヴァイオリンが聴こえて来るが、ファウストは村娘を抱いて森に入って行く。ワルツは途切れ途切れに聴こえて来て、イ長調で終わる。

リスト　　「ペトラルカの３つのソネット」より　“平和は見つからず”
F. Liszt　　[Tre sonetti di Petrarca]~　"Pace non trovo"

ピアノ演奏における偉大なヴィルトゥオーソだったフランツ・リストは数多くのピアノ作品を残しており、また管弦楽においては交響詩の創始者としても知られているが、実はかなりの数の声楽作品を残している。その中でも「ペトラルカの３つのソネット」はかなりよく知られ、またピアノ版もある。そして３曲のうち、最も演奏される機会が多いのが第１番のこの“平和はみつからず”であり、ソプラノ、テノール歌手のレパートリーとなる機会も多い。

曲はあたかも苦悶するような半音階的な和音進行をともなうピアノの前奏ではじまり、一時的にヘ長調に半終止すると、「平和は見つからず」と歌い出す。転調を連ね、レントとなりヘ長調に落ち着き第二節に入る。三連音符の分散和音に乗って奏された美しいピアノの旋律を歌が模倣する。第三節の「目が見えないのに見ようし、口がないのに叫ぼうとする」からは、第二節で現れたモチーフが、調を変えながら連なって行き、内に秘めていた情熱がほとばしるかのように昂揚して行く。第四節に入ると第一節の歌い出しの音型をピアノが思い出したように奏し、歌がそれを反復する、そして、最後は安らぐように弱奏で曲を閉じる。この作品は強い内面的な感情表現を必要としており、歌い手の表現力が試される作品である。

ターナー　　「リコシェ」
K.Turner　　[Ricochet]

作曲者のケリー・ターナーはアメリカン・ホルン・カルテットのメンバーの一人で、ホルンアンサンブルの曲を多く書いている。

「リコシェ」はフランス語源の英語で、弾丸や石などの固い物体が、壁や水面などにぶつかって跳ね返る様子を指す言葉であり、その言葉通りこの曲も、鋭く攻撃的な部分や、

跳ね返るような呼応などが用いられており、また、各楽器の可能性を最大限に引き出している曲である。　　（若松将正）

※この作品については、楽譜も CD も手許に無かったため、楽曲解説を出演者にお願いしました。（中島）

ドニゼッティ　歌劇『ランメルモールのルチア』より　狂乱の場

G.Donizetti　[Lucia di Lammermoor] ~　“Il dolce suono mi colpi di sua voce!”

フランス革命後の政情不安な 19 世紀前半には狂乱シーンを持つオペラが流行した。ドニゼッティ『ランメルモールのルチア』は、ベッリーニの『清教徒』、トマの『ハムレット』と並んでその種のオペラの代表作である。原作はイギリスの詩人スコットの小説『ラマームームの花嫁』である。恋人との仲を裂かれ、意に沿わない結婚を強要されたルチアが、狂って自分の夫となるべき男を刺し殺してしまう。

「狂乱の場」はこのオペラのクライマックスであり、高度なコロラトゥーラの技術を必要とする。狂って夫を刺し殺したルチアはハ短調で「あの方のやさしい声が私を打ちました」と恋人エドガルトとの幸せな想い出を歌う。変ロ長調になると「バラの花が蒔かれているわ、天上のハーモニーが聴こえて来る。」と歌う。やがて兄のエンリーコが入ってくるが、あまりの陰惨な光景に驚く。ここからアリアの第二部に入る（変ホ長調 3/8）。ルチアは「兄のことを思い、心ならずも結婚のサインをしたが、今でもエドガルドを愛していると歌う。エンリーコは無理な結婚を強要したことを悔やむ。」ルチアはなおも歌い続け、最高音を歌ったところで倒れる。なお、このオペラの結末を語ると、気の狂ったルチアは死に、ルチアの死を告げられたエドワルドは剣で自分の胸を刺して後を追う。

ショパン　　バラード第３番　変イ長調　作品４７

F. Chopin　　Ballade　No.3　A♭ Major　op.47

フレデリック・フランソワ・ショパン（1810-1849）は「バラード」を４曲作曲しているが、原調のＩの和音から開始される曲は１曲もない、バラードに限らず他の作品でもベートーヴェンなどとは異なり主和音から始まる曲が少ないのは、ショパンの作風の特徴の一つであろう。しかし、第１番、４番が原調以外の調で始まっているのに対し、この曲は原調のＶの和音で開始されており、比較的穏やかな始まりと云えるかもしれない。形式はソナタ形式ではないが、ソナタ形式に類似した構成法が覗われる。最初の主題は音階的に上行するモチーフで構成されているのに対し、第二部のヘ長調と、ヘ短調の副主題は音階的下降するモチーフから成っている。変イ長調の中間部を経て嬰ハ短調となるが。このセクシュンはソナタ形式における展開部を想起せるところがあり、第二部で現れた副主題が煌びやかに展開されている。そして、再び原調に戻り、最初の主題が力強く高々と奏され、コーダで中間部の楽想が再び現れ曲を閉じる。

ドニゼッティ　　歌劇『アンナ・ボレーナ』より
“あなたがた泣いているの？～私の生まれたあのお城”
G.Donizetti　　「Anna Bolena」~　“Piangete voi?...　Al dolce guidami castel natio”

『アンナ・ボレーナ』は、ドニゼッティのオペラの中でも特に芸術性の高い作品である。題材となった人物はエリザベス一世を生んだ英国の王妃アン・ブーリンである。彼女は姦通罪で、ロンドン塔にて斬首の刑を受けている。その歴史的事件にもとづき、王、王妃とそれを取り巻く男女の愛と権力の確執がもたらす悲劇として仕上げたのがこの作品である。

“あなたがた泣いているの？は、このオペラの終盤、アンナがロンドン党の牢獄で歌うアリアである。ヘ長調 4/4 のゆったりとしたテンポで始まるが、やがて悲しみの情が込み上げ音楽は短調に変わる。そして再びヘ長調に戻り、2/4 拍子で歌われるのが、**”私の生まれたあのお城”**である。アンナは「私を故郷のお城に導いて！　若い日の愛を返して！」と幸せだった若き日を懐かしみ、錯乱状態で歌う。やがてアンナは小太鼓の音で正気に戻り、兄や自分に想いを寄せた男に詫び、新王妃誕生の祝砲が鳴り響く中、息を引き取る。

山田　耕筰　　〈城ヶ島の雨〉

山田 耕筰(1886-1965)は多くの歌曲を残しており、現在でも歌い継がれている作品が多いが、北原白秋の詩による**〈城ヶ島の雨〉**については梁田貞の作曲した曲の方がよく知られている。山田耕筰の歌曲はハ長調 6/8 で始まるが、途中で変拍したり、半音上の変ニ長調（ナポリ調）に転調したりしており、また声域も高めで、素人が歌うには少々難しい。どちらを好むかは人それぞれであろうが、素朴で日本的情緒に溢れた方を好むなら梁田貞、プロの声楽家が自分の力量を発揮出来る作品を選ぶとしたら山田耕筰となろうか。

チレア　　歌劇『アルルの女』より　　〈フェデリーコの嘆き〉
F.Cilea　　[L'Arlesiana] ~　　“Il lamento di Federico”

フランチェスコ・チレア（1 865-1950）は、『アルルの女』や『アドリアナ・ルクヴルール』などの作品で、一時は、レオンカヴァッロやマスカーニらに続くヴェリズモ・オペラの旗手として評価された。その当時ほどでの人気はないが、彼のオペラ作品は今日でも上演される機会はそう少なくはない。

『アルルの女』は、ビゼーの劇音楽と同様、ドーテーの原作にもとづいている。**〈フェデリーコの嘆き〉**は, アルルの女に心を奪われた主人公のフェデリーコが、周囲から反対され、恋の悩みを深め、安らかに眠ってしまいたいと歌うアリア。ヘ長調 6/8 で歌い始めるが、「私は眠りたい」と歌う個所から、ホ短調 4/4 に変わり、情熱的に高まって行く。イタリアオペラならではの美しいアリアで、豊かな声量と長い音を歌い続けられる呼吸法を身につけた歌手が歌えば、聴衆を十分に堪能させる力を持つアリアである。

会と会員の情報

4　月

１日(月) 原口摩純(Pf.) ＆ 石川寛子(Vn.)　～ソロとデュオのリサイタル～
ブラームス：Pf.とVn.の為のソナタ第１番「雨の歌」他
【東京文化会館小ホール19:00開演 一般3,500円 **日本音楽舞踊会議後援事業**】

５日(金) **ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１３**
～より豊かな音楽の未来をめざして～
【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演　2,500円 】

８日(月) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**

14日(日) 並木桂子(Pf.) Second Sunday Concert
モーツァルト：ソナタイ短調・ベートーヴェンソナタ：月光　他
【ユーロピアノ千歳烏山サロン　時間未定】

20日(土) 深沢亮子(Pf.)－共演：瀬川祥子 (Vn)
モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ B-Dur K.454
シューベルト：ソナチネ　No.3　g-moll　D.408
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No.10　G-Dur op.96
【新宿住友ビル７階　朝日カルチャーセンター　午後16時～17時半
問合せ:TEL03-3344-1945】

27日(土) 金子みすゞ生誕110年記念＜金子みすゞの世界＞
～東日本大震災復興支コンサート～
歌と朗読による＜金子みすゞの世界＞みすゞの生きた時代の童謡
出演　歌：浦　富美・渡辺裕子・杵島純子
作曲＆エレクトーン：西山淑子　合唱：コーロフィオーリ 他
【14：00開演　市川市文化会館小ホール】　　入場料：一般　2,000円
高校生まで＆障がい者　1,000円　**日本音楽舞踊会議後援事業】**

27日(土) 深沢 亮子(Pf.) －　公開レッスン (15:00～17:00) コンサート (18:00)
浪市美濃源氏フォーラム ホワイトスクエア 問合せ:0572-68-3143事務局】

5　月

17日(金) **機関誌編集会議　19:00～　日本音楽舞踊会議事務所**

19日(日) 橘川琢 (作曲) 詩と音楽を歌い、奏でる「トロッタの会」Vol.17
詩歌曲《夏の國 emento (詩：木部与巴仁) 》op.45b (2010/2013) 改定初演
～ソプラノ・詩唱・ヴァイオリン・ヴィオラ・ピアノ・花道による【早稲田奉仕園スコットホール　18:00開演前売り3,000円／当日3,500円】

23日(木) 深沢亮子(Pf.)－ 共演:藤井洋子(Cl.) H.ミュラー(Va.)
シューベルト：４つのワルツ、即興曲OP.142-2 アルペジオーネソナタ
共演:H.ミュラー(Va.)
シューマン：３つのロマンスOP.94　　共演:藤井洋子(Cl.)
モーツァルト：ケーゲルシュタット・トリオ K.498
【19:00小金井市民交流センター　問合せ:042‐387-7728 (鈴木) 】

23日(木) 神田麻衣ピアノリサイタル～極楽鳥の歌う夜～
演奏曲：浅香満：二つの間奏曲、八代秋雄ピアノソナタ他、
【19:00　スタインウェイサロン東京松尾ホール】入場料:3,500円

6　月

14日(金) **日本音楽舞踊会議作曲部会作品展２０１３**
【すみだトリフォニーホール小ホール 17:50開場（18:20開演）
全自由席 3,000円　問合せ　日本音楽舞踊会議℡03-3369-7496】

プログラム
１）金藤　豊：静御前に捧ぐる挽歌
２）穴原雅己：島崎藤村の詩による２つの秋の歌
３）古澤　　彰：「No meaning－ピアノと弦楽器のための」
４）高橋雅光：“ピアノのための「カプリチオ」”
５）中嶋恒雄：小磯仁の詩による「海の約束 女声合唱のための」
６）高橋　通：「箏独奏ソナタ第８番」
７）北條直彦：「変容-ソロ・ヴァイオリンのための」
８）桑原洋明：『御佛の四つの本願より』

15日(土)芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」
ゲスト：高橋哲哉（東京大学大学院総合文化研究科教授）アルプス音楽団
講演「犠牲のシステムから平和の秩序へ－原発と基地問題を考える」他
【牛込箪笥区民ホール　１４：００　２２００円】

16日(日) 並木桂子(Pf.) 共演：山中由香理(Cl.)　富永佐恵子(Vc.)
原宿・午後のひととき～トリオで楽しく～（仮題）
シューマン:ファンタジーOp.88、ブラームス:クラリネットトリオ、
ハンガリー舞曲他　【原宿アコスタジオ　時間未定】

20日(木) **機関誌編集会議　19:00～　日本音楽舞踊会議事務所**

24日(月) 深沢 亮子(Pf.) －翔の会 公開レッスン【トモノホール 11:00～14:00】

7　月

3日(水) 並木桂子(Pf.)－　共演：印田千裕(Vn.)、富永佐恵子(Vc.)
ヴァイオリンとチェロとピアノのコンサート
ドヴォジャーク：ドゥムキー、モーツァルト：メヌエット、
ホルスト：ジュピター他　【中小岩小学校、公民館他 15:30～他　入場無料】

4日(木) **ピアノ部会第２６回公演　～華麗なる響き 2013～**
【杉並公会堂小ホール 19:00開演　全自由席 3,500円
問合せ：日本音楽舞踊会議 ℡03-3369-7496】

プログラム
1) 栗栖麻衣子＆山下早苗(連弾)／ストラヴィンスキー:ペトルーシュカより
2) 太田恵美子／ラフマニノフ：ピアノのための前奏曲Op.3 No.2 嬰ハ短調
13の前奏曲Op.32 No.5ト長調,No12 嬰ト短調
3) 原口摩純／リスト＝ワーグナー：「イゾルデの愛と死」
リスト：超絶技巧練習曲 第10番 へ短調
4) 北川曉子／ショパン：アレグロ・ドゥ・コンセール
5) 大矢絢子／ラヴェル：「鏡」より 洋上の小舟
6) 広瀬美紀子／助川敏弥：前奏曲集より No1, No5（初演）
メシアン：前奏曲集より第8曲「風に映る影」
7) 戸引小夜子／ボルトキエヴィッチ：エチュードp.15　7、9、10番
8) 深沢亮子＆草野明子(連弾)／シューベルト:幻想曲ヘ短調 Op.103　D.940

5日(金)**声楽部会公演　歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート**
～中山晋平　大正ロマンとその時代～
出演：歌の案内人＆バリトン　佐藤光政
歌：浅香五十鈴・内田暁子・浦　富美・笠原たか・嶋田美佐子・高橋順子
吉仲京子・渡辺裕子
ピアノ：坂田晴美　　【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演】

9日(火)深沢亮子(Pf.)－共演：田原綾子(Vla.)
シューベルト：アルペジオネソナタ他
【新宿住友ビル７Ｆ　朝日カルチャーセンター　13:00】

21日(日)**機関誌編集会議　14:00～　日本音楽舞踊会議事務所**

21日(日)「翔の会」20周年記念コンサート　深沢亮子賛助出演
【浜離宮朝日ホール13:30】
21日(日) 日本尺八連盟 埼玉支部 定期演奏会－
高橋雅光作曲：尺八・箏・十七弦による大合奏曲「彩の国の旅路」(初演)
【久喜市民文化会館14:00開演　入場料3,000円】
21日(日) 作曲：橘川琢／作曲：清道洋一
「ぷらイムスペシャルプログラム『語りとテルミンで紡ぐ　アグニの神』」
１．抒情組曲「日本の小径（こみち）《古道探訪集》op.55」より「2つの風舞・～建長寺760年に寄せて」～テルミンとギターによる（初演）（作曲）橘川琢、（テルミン）大西ようこ、（ギター）三谷郁夫
２．「アグニの神（原作：芥川龍之介）」（初演）（作曲）清道洋一、（語り）水沢有美、（演奏）ぷらイム（大西ようこ・三谷郁夫）（美術）関根賢治
【鎌倉・建長寺方丈（龍王殿）　16：00開演】
前売り3,000円／当日　　3,500円　＋建長寺拝観料300円が必要です。

8　月
22日(木) 栗栖麻衣子(Pf.)他出演 － つぼみの会 子育て応援コンサート
＊11:00～あいうえおんがくかい　　＊12:30～いろはにほっとコンサート
＊15:30～かきくけコンサート(全3回公演)　　【熊谷市文化創造館さくらめいと月のホール各部とも一般・小学生以上500円未就学児無料　通し割引券あり
【問合せ:事務局080-3310-4238　**日本音楽舞踊会議後援事業**】

9　月
16日(月) 深沢亮子(Pf.)　－　デビュー60周年 連弾と2台のピアノ作品による
共演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子、栗栖麻衣子
予定　モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール14:00開演　問合せ:03－3561－5012（新演奏家協会）】

26日(木) **CMDJ 2013年オペラコンサート**
【すみだトリフォニー 小ホール（詳細未定）】
30日(月) 深沢 亮子(Pf.) 翔の会 モーツァルト公開講座【10:00～会場未定】

10　月
28日(月) **様々な音の風景Ｘ　～20世紀以降の音楽とその潮流～**
【すみだトリフォニー 小ホール（詳細未定）】

11　月
8日(金) **若い翼によるCMDJコンサート６**

【すみだトリフォニー小ホール（詳細未定）】出演者募集中

11 日(月) 深沢 亮子(Pf.) － 翔の会 公開レッスン　　【10:00～　会場未定】

25 日(月) 深沢亮子(Pf.) －３台のピアノのための協奏曲【文京シビックホール】

12　月

２日(月) 並木桂子(Pf.)－ 共演：岸洋子(Pf.)、関森温子(Voc.)、島田真千子(Vn.)他　　アレンスキーの魅力（仮題）シリーズ１
２台のピアノの為の組曲第１,２番、ピアノトリオ第１番、歌曲集より
【杉並公会堂(小) 3,500 円(小学生以下 1,000 円) 19:00 開演
問合せ：並木 080-3003-2102】

６日(金) **深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”（仮称）**
出演：深沢亮子(Pf.)恵藤久美子(Vn.)安田謙一郎(Vc.)
助川敏弥：Gismonda(2010～2011)、ちいさきいのちのために(2004)
モーツァルト：ピアノトリオ G-Dur K.564
ミヨー：ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ　OP.324
モーツァルト：ピアノトリオ C-Dur K.548　　**【音楽の友ホール】**

８日(日)栗栖麻衣子(Pf.)他出演
－ぴあの×ぴあの～２台ピアノによるコンサートリスト：交響詩 前奏曲、ラフマニノフ：組曲第２番、ブラームス：ハイドンの主題によるヴァリエーション、２台８手、２台１２手作品他
【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール 一般 2000 円/高校生以下 1500 円問合せ:事務局 080-3310-4238　**日本音楽舞踊会議後援事業】**

２０１５年

1　月

19 日(日) **声楽部会公演「2014 年　新春に歌う」（仮称）**
【すみだトリフォニー小ホール（昼間公演）】

****

会員スケジュールの表示（凡例）について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。
明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。
明朝体太文字は、運営に関わる会議等の予定です。
「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上項目内容を変更する場合があります。

正会員・準会員・賛助会員の皆様へ

〇上記スケジュールに記載の本会主催事業には、会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。
〇会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
〇お知らせの際は、①〇月〇日(曜日)②会員名　③催し物(出版物等)名④メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ　⑤【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

****

２．事務局よりのお詫び

本誌３月号５１頁に掲載致しました会員名簿に、事務局の手違いにて松村伸子賛助会員のお名前が記載されておりませんでした。ここに謹んでお詫び申し上げます

編集後記

２月まではことのほか寒い冬でしたが、３月に入ると急にポカポカ陽気が続くようになり、３月の下旬には早くも桜が満開になってしまいました。4 月 5 日には第 11 回目を迎えるフレッシュコンサートが開催されますが、その頃には、もう桜は散ってしまっているかもしれません。このところ、我が国の景気が少し上向いて来たようですが、それが音楽文化に反映されてくるのはまだ先のようです。

今の時代に、若い音楽家の卵たちが音楽界に巣立って音楽活動を続けて行くことはなかなか大変です。フレッシュコンサートは、そうした人達にチャンスを与え、音楽家として成長して行けるよう、支援することを目的に開設された催です。多くの方々のご来場を期待しいたします。これからは暖かくなったといっても急に寒さが戻ることがあります。お互いに健康に留意し、頑張ろうではありませんか。

（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橋川 琢　高橋 通　湯浅玲子
編集部員：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦

音楽の世界 4 月号(通巻 548 号)
2013 年 4 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします